



TITLE:

明治末期の在日ベトナム人とアジア諸民族連携の試み：「東亜同盟会」ないしは「亜州和親会」をめぐって

AUTHOR(S):

白石, 昌也

CITATION:

白石, 昌也. 明治末期の在日ベトナム人とアジア諸民族連携の試み：「東亜同盟会」ないしは「亜州和親会」をめぐって. 東南アジア研究 1982, 20(3): 335-372

ISSUE DATE:

1982-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/56105>

RIGHT:

明治末期の在日ベトナム人とアジア諸民族連携の試み

——「東亜同盟会」ないしは「亜洲和親会」をめぐる——

白石昌也*

Cooperation between Vietnamese and Asian Peoples in Japan in the Late Meiji Era

——An Organization Called the Đông Á Đông Minh Hội
or the Ashū Washinkai——

Masaya SHIRAISHI*

This paper discusses the Đông Á Đông Minh Hội, or the “League of East Asia,” an organization which, in his memoirs, Phan Bội Châu claims to have joined in the fall of 1908. Information from Japanese and Chinese sources, however, indicates that the League could not have been established in the second half of 1908, because at that time four of the most important participants listed by P. B. Châu in his memoirs had either left Japan or were in prison. Various Japanese, Chinese and Vietnamese sources further indicate that this League was identical with the Ashū Washinkai, the “Asian Friendship Association.” According to Japanese sources, the Association was established in the fall of 1907, a year earlier than P. B. Châu claims.

Students of Vietnamese nationalism, relying exclusively on P. B. Châu’s memoirs, have concluded that the League was set up when the Japanese authorities, under pressure through French diplomatic channels, started suppressing the Vietnamese movement in Japan, causing P. B. Châu to become disillusioned with Japan. Since the League was established well before Japanese policy turned against the Vietnamese,

however, other reasons should be sought for P. B. Châu’s decision to join the League. The year 1907 saw a crucial change in official Japanese policy toward her Asian neighbours and the Western colonial powers, which drew criticism from *émigrés* of the other Asian nations who resided in Japan. Through a series of treaties with the Western powers, the Japanese government publicly demonstrated its willingness to cooperate with the colonialists at the expense of the Asian peoples. A few years earlier, after the Russo-Japanese War, many Asian nationalists tended to regard Japan as the champion of the yellow race against the white colonialists. Yet in 1907 the Chinese revolutionaries and Indian activists in Japan, as well as the Japanese socialists, increasingly expressed the idea that Japan was not a friend of Asia but a “common enemy” who belonged to the white imperialists’ camp. By the summer of 1907, the Chinese, Indian and Japanese activists were in close contact with each other and with Korean, Phillipino and Vietnamese *émigrés*.

P. B. Châu was shocked by Japan’s signing of a treaty with the French in June 1907 and abandoned his idea of “relying on Japan.” Instead he joined the revolutionaries from other Asian nations and the Japanese socialists in placing their hopes on cooperation between peoples with the “same sickness.” By 1907 the term “same sickness” (*đồng bệnh* in Vietnamese, *t’ung ping* in Chinese) had

* 大阪外国語大学タイ・ベトナム語学科；Thai & Vietnamese Department, Osaka University of Foreign Studies, 2734 Aomadani, Minoo City, Osaka 562, Japan

become a key word in Chinese arguments for the need for solidarity among the oppressed Asian peoples. Furthermore, in his memoirs and in his letter to Foreign Minister Komura in 1909, P. B. Châu used the opposing terms “universal principle” (*công lý* in Vietnamese, *kung li* in Chinese) and “strong force” (*cường quyền* in Vietnamese, *ch’iang ch’üang* in Chinese) that the Chinese revolutionaries, especially the anarchists, also used: “universal principle” stood for the righteousness of oppressed peoples, and “strong force” for their suppression by imperialists.

It is logical to argue that a few years after P. B. Châu came to Japan to seek Japanese assistance, he finally abandoned his reliance on Japan and turned to the building of cooperation among the nationalists of suffering Asia. In seeking Japanese assistance, he had stressed common cultural background, ethnicity, and geographical proximity between Vietnam and Japan, expressed in the phrase “the same culture, the same race, and the same continent.” His shift in emphasis to the “same sickness” demonstrates a shift in his identification of the fate of his nation with that of a strong and rich Japan to that of weak and oppressed Asia.

Although P. B. Châu shared some opinions with the revolutionaries from other countries, particularly concerning the Japanese attitude toward Asia and the colonial powers, he did not agree with them in every aspect. It is worth mentioning that the Japanese and Chinese participants in the League of East Asia were deeply influenced by anarchist ideas, because they found in them a solution to the impasse of the social Darwinist explanation of the existing world order. In other words, they refused to accept that struggles between nations, with the stronger eating the flesh of the weaker, were inevitable. They argued that Asian peoples should not establish nation-states after the anti-colonial revolution had succeeded, since they believed that without state and government, they could avoid the Darwinistic zero-sum game among Asian nations. It is evident that they set up the League in order to spread this anarchist idea among the Asian revolutionaries. Nevertheless, it is apparent that P. B. Châu did not and could not accept their arguments on this point, since he was every inch a man of strong nationalist sentiment and clung to the idea of building an independent nation-state of the Vietnamese people.

人或は曰ふ、理想は理想なり、実行すべきにあらずと、余以為らく、理想は実行すべきものなり、実行すべからざるものは夢想なりと

——宮崎滔天『三十三年の夢』自序

革命派、日本の社会主義者、そうしてベトナム、インド、フィリピン、朝鮮の在日活動家

はじめに

ドンズ
東遊運動 (Phong Trào Đông Du)¹⁾ の指導者ファン・ボー・チャウ (Phan Bội Châu, 潘佩珠) は、そのふたつの回想録²⁾ の中で、彼ら在日本ベトナム人が「東亜同盟会」(Đông Á Đông Minh Hội) なる組織に関与したことを記している。

「東亜同盟会」は、後述するように、中国

『獄中書』に関しては、本稿においてはその邦訳 [潘 1966] を引用する。

『潘佩珠年表』は『自判』ないしは『自批判』とも呼ばれる。いま筆者の手許には、パリ在住のホアン・スアン・ハン (Hoàng Xuân Hân) 氏所蔵の漢文筆写稿のコピー [HXH 所蔵本] があるので、本稿ではこれを主として参照する。ただし、以下の越訳版を適宜参照する。ハノイの研究者が彼地に残る漢文筆写稿をもとに越訳した版。その初版は『自批判』(*Tự Phê Phán*) のタイトルのもとに1955年に出版され、その再版が『潘佩珠年表』(*Phan Bội Châu Niên Biểu*, NB と略称) と改題され1957年に刊行されている。本稿では、このうち1957年の再版を参照する。他方、フエの出版社が独自に彼地残存の漢文筆写稿をもとに訳出したのが『自判』(*Tự Phán*, TP と略称) であり、1956年に刊行された。本稿ではこのTPをも参照する。

1) 東遊運動の概観については川本 [1966a] および Marr [1971] を参照されたい。

2) ファン・ボー・チャウの回想録としては、1914年に執筆された『獄中書』と、晩年の執筆になる『潘佩珠年表』がある。双方とも原漢文。

を糾合する組織であった。チャウの言葉を借りれば、その組織の趣旨は「全亜諸亡国の志士と聯絡し、互いに提挈し合い、もって各民族をしてともに革命の舞台に躋らしめることを謀る」(本稿339ページ参照)ことにあった。このような組織にチャウたちベトナム人が関与したことに關しては、少なくとも次の点に留意しておく必要がある。

そもそもファン・ボイ・チャウは、日本からの援助を期待して、日露戦争期の日本に渡来した。渡日当初、彼は中国保皇派の在日政客梁啓超を頼りとし、また犬養毅や大隈重信(とりわけ前者)、そして東亜同文会系の日本人からの助力を得た。しかし、その滞日期の後半においては、日本への失望と不信を深めていったと考えられる。彼の「東亜同盟会」への参加は、そのような彼の対日認識の変化の過程³⁾で、どのように位置づけられ得るのか。また、同組織への参加から、彼の対日認識の変化の契機を読みとることはできないのであろうか。特に、この組織が、日本を舞台として設立されたにもかかわらず、日本政府の助力や、日本政府の政策に連なる日本人政客の庇護を拒否した地点での、アジア人同志の連携を自覚的に追求したことは、注目に値する。しかもその組織が、単に2民族間の協力(ないしは援助の供与と獲得といった関係)という次元にとどまらず、アジアの諸民族を包含するマルチ・ナショナルな次元での連携を志向していたことに留意する必要がある。また、そのような連携の契機が、全アジアの「亡国」諸民族同志の協力におかれていたことにも、注目しておくべきであろう。

このように問題が重要かつ多面的な性格を有しているにもかかわらず、従来のベトナム史研究においては、「東亜同盟会」の成立の経

緯とその位置づけに關して、ファン・ボイ・チャウの回想を無批判に踏襲するのみで、それ以上の研究の深化を企図したものはなかった。そのことは第1に、従来の研究者がおしなべて、「東亜同盟会」の成立を、1908年末のこととしている点に示されている[Boudarel 1981: 166; Duiker 1976: 67-68; Lê Văn Hào *et al.* 1967: 15-16; Marr 1971: 146-148; Viện Văn Học 1970: 369-370]。これはチャウの回想における記述をそのまま踏襲したものにはほかならない。しかし、本稿で筆者が指摘するように、その主要参加メンバーについての検討から導き出される結論は、「東亜同盟会」の成立を1908年末のこととするのは妥当ではないということである。

次に、それに関連して、従来のベトナム史研究者が、「東亜同盟会」へのチャウたちの参加の経緯を、1907年の日仏協約→それに基づくフランス当局よりの要求→1908年中半以降の日本当局による東遊運動の弾圧→チャウたちの日本への失望、といった文脈の中で評価している点⁴⁾も疑問とせねばならない。これもチャウによる回想をそのまま踏襲したものである。しかし、本稿において指摘するように、「東亜同盟会」の成立時期は、実際には日本当局による弾圧事件の発生より以前のこととしなければならない。とするならば、従来のベトナム史研究における、チャ

4) その最も典型的な例は、W. ダイカー氏による次のような評価である。「ベトナム人を追放するとの日本の決定のニュースが明らかとなると、ファン(・ボイ・チャウ)は、日本を頼りにし得ないことを明白に知り、どこかほかに助力を求めることを決めた。彼は、日本の急進主義者(彼らは、東アジアおよび東南アジアの反植民地主義分子を、反帝国主義で統一するために、政治亡命者のマルチ・ナショナルな組織を作り出そうと試みていた)と接触を持っていたので、まず東亜同盟会を組織した」[Duiker 1976: 67]。

3) チャウの対日観とその変遷に關しては川本[1972], Shiraishi [1975], 白石[1981b], 白石[近刊]を参照されたい。

ウたちの対日認識の変化の契機、および「同盟会」参加の契機に関する理解も、再検討を加えなければならないこととなる。

さらに第3に、「東亜同盟会」には日本、中国などの活動家たちも参加しているのであるから、日本・中国側の文献を検討することによって、ベトナム側の文献から得られる情報と比較検討する作業が必要である。しかるに、従来のベトナム史研究においては、このような面での努力も主として語学上の障碍から（研究者の多くは欧米、ベトナム人である）未開拓のままに残されてきた。具体的には、日本・中国側の文献にみえる「亜洲和親会」と「東亜同盟会」の比較検討が、本稿の前半部分の主題となる。⁵⁾ さらには、日本・中国側の文献を参照することによって、「東亜同盟会」の成立の背景としてあった、当時の東アジアの国際環境（とりわけ日本の対アジア政策の動向）と、それに対する在日アジアの革命家および日本の社会主義者の認識と対応を、より深く理解することができる。そうしてそのことによって、チャウたちベトナム人の「東亜同盟会」への参加の契機とその背景を、より深く、かつより多面的に理解することも可能となると思われる。⁶⁾

5) 「亜洲和親会」については、竹内 [1948]、糸屋 [1950]（糸屋 [1967] に再録）、石母田 [1953]（竹内好 [1968] に再録）、Jansen [1970]（初版1954年）、平野 [1955]、小野川 [1964]（小野川 [1975] に再録）、寺広 [1966]、平野 [1966]、永井 [1968]、丸山 [1971]、神崎 [1971]、小島 [1972]（小島 [1978] に再録）、松本 [1974]、山泉 [1975]、狭間 [1975]、大杉孝平 [1978] などに言及がある。なお本稿注7を参照。

6) 筆者は前稿 [白石 1981b : 263 以下] において、日本・中国側の文献を参照することによって、従来の研究の限界を越え得ることを示した。しかし前稿では、紙数の制限もあって、十分に議論を展開し得たとは言いがたい。本稿をもって「東亜同盟会」に関する専論を試みたゆえんである。

以上の点に留意しつつ、本稿においては以下のような構成をとることとする。まず第Ⅰ～Ⅱ節においては、チャウの回想にいう「東亜同盟会」と日・中側の文献にみえる「亜洲和親会」とが同一組織にほかならないこと⁷⁾を、参加メンバー、名称問題、活動時期の3点にわたって、具体的に検討する。しかるのちに第Ⅲ節においては、在日ベトナム人の「東亜同盟会」参加の契機を、当時の東アジアをめぐる国際環境や、中国、インド、日本の革命家の認識と対応にも留意しつつ、検討を加えることとする。

Ⅰ 「東亜同盟会」と「亜洲和親会」

ファン・ボー・チャウの回想録のひとつ『獄中書』（本稿注2参照）には、「東亜同盟会」に関して、次のような簡略な記載があるのみである。

けだし私が昔日本に留って居った時、かつて黄克強（黄興）、章太炎（章炳麟）らと交わりを結び、また張継らや日本・朝鮮・印度・フィリピン諸国の志士とともに、東亜同盟会を組織して亡国をいたみ、回復を図った [潘 1966 : 146]。

これに対して、いまひとつの回想録たる『潘

7) 実は、この点に関する指摘そのものは、すでに一部の中国史研究者によってなされてきた [永井 1968 : 97 注51; 寺広 1966 : 139-140]。しかし、従来なされてきた指摘は、ふたつの組織が同一物であると比定するための、具体的な論証の手続きを踏まえたものであったとは言いがたい。

なお、従来のベトナム史研究者の中にあっても、唯一 G. ブーダレル氏が「亜洲和親会」に言及している。その情報源は M. ジャンセン氏の著書 [Jansen 1970] である。しかしブーダレル氏は、「東亜同盟会」と「亜洲和親会」とを全く別の組織とみなし、前者を1908年、後者を1907年の設立とするのみであり、それ以上の立ち入った詳細な分析はなされていない [Boudarel 1981 : 166-167]。

『年表』(以下『年表』)には、かなり長い記載がある。そこで以下に、「東亜同盟会」設立以前からの経緯を、『年表』に基づきつつ要約してみよう [HXH 所蔵本；NB 1957：100 以下；TP 1956：105 以下]。

フランス当局は、1908年初めに、チャウが日本からサイゴンに送ったふたりのベトナム人連絡要員を逮捕する。これをきっかけとして、フランス当局は、チャウたちの組織の実態を具体的に掌握した。そこで彼らは、一方において、ベトナム国内の父兄をして、在日ベトナム人留学生に帰国を促す手紙を書かせた。と同時に、日仏協約が締結されて(1907年6月)外交情勢が一変していたので、フランス政府は日本に対して、在日ベトナム人に関する要求を出す。日本当局もこれを受け容れ、東亜同文書院(とチャウは記すが、実際には東京同文書院のこと)内のベトナム人学生への干渉を開始した。そうして1908年陰暦九月になると、日本政府はベトナム人学生の解散命令を出した。陰暦冬十月には、学生の解散が完了し、在日ベトナム人学生の組織たる「公憲会」も消滅した。⁸⁾ ここにおいて、チャウは次のような心境の変化をきたしたと、『年表』に書き留める。「日本の恃む可からざることを知り、専ら中華革命、および世界各民族の自分たちと同病の者に傾向する」⁹⁾ こととなった、と。

そうして、この時に至って、チャウは、かつて宮崎滔天が彼に語った言葉を思い出す。

8) この間の経緯についての、チャウの回想録と外務省外交史料館文書 [b] の間の比較検討は、川本 [1980] を参照されたい。

9) 原文「余知日本之不可恃 [NB 117 ページには「自分たちの事業は日本に頼み得ない」とある]、専傾向於中華革命、及世界各民族之與我同病者 [TP 120 ページは「中華革命を専ら傾向し、われわれと同病の民族に希望を持つ」とあって、「世界」が欠落している]」[HXH 所蔵本；越訳の該当箇所は NB 1957：117；TP 1956：120]。

彼は以前に、孫文の紹介で、「日本浪人」にして「全世界革命の思想を富有」する滔天と面談したことがある。その時宮崎は、チャウに向かって「貴国は、自力ではフランス人を打倒することが、きっとできないにちがいない。だから、友邦に援助を求めるのは悪いこととはしない。しかし日本は、どうして諸君を厚援し得ようか。日本の政治家は、大抵野心に富み、義侠には貧しい。君は宜しく青年たちをして、英語、ロシア語、ドイツ語を大いに学ばしめ、世界の人々と大いに結交し、フランス人の罪惡を鳴らし、世界の人々にこれを聞かしめるように勤めよ。人道を重んじ強權を薄う人々は、世界に少なくはない。彼らにして初めて諸君を援け得よう」¹⁰⁾ と語った。チャウは、その時はまだこの宮崎の言葉を深く信ずることはできなかった。しかし、時ここに至って、その「聯絡世界之思想」に納得した。だが、欧米を「浪遊」することを欲しても、彼らにはそのための資金もなく、また欧文にも通じていなかったのも、欧米人士との接触は、後日を期せざるを得なかった。そこでまず第1歩として、「全亜諸亡國の志士と聯絡し、互いに提挈し合い、もって各民族をしてともに革命の舞台に躋らしめることを謀る」こととした。また同時に、(ベトナム人に対する)「革命主義の宣伝をもって、亡国期間中の教育とする」¹¹⁾ こととした。

10) 「貴國自力必不能傾倒法人 [NB 117 ページには「貴国の力量は……」]、其求援於友邦、未爲不是、然日本何能厚援君。日本政治家、大抵富於野心、而貧於義俠。君勸宜青年輩、多學英語、俄德語、多與世界人結交、鳴法人之罪惡、使世界人聞之。重人道、薄強權、世界正不乏此等人、始能與君等援耳」[HXH 所蔵本；NB 1957：117；TP 1956：120-121]。

11) 「其第一步則擬先聯絡全亞諸亡國志士、互相提挈、以謀共躋各民族於革命之舞臺(臺) [TP 121 ページの訳文によれば、「もう1段階レベルを下げねばならなかった。すなわち、まず

しかし彼らはその時、活動のための資金不足に悩んでいた。この窮状を救ってくれたのが浅羽佐喜太郎である。彼から1,700円の資金の提供を受けると、チャウはこれを三分して、それぞれ外交費、印刷費、生活費にあてた。かくして「外交」活動も可能となり、「東亜同盟会」の結成に至るわけである。「東亜同盟会」に関する記載について、以下に『年表』の原文を示す。ただし引用に際しては、HXXH 所蔵本（注2参照）をもととし、越訳版たる NB および TP（注2参照）における異同箇所は、適宜〔 〕内に示すこととする。

得款後、余即摘爲三欸之分配、最多者爲外交費、印刷費次之、庶居費又次之。既則奔走於中華革命黨、與日本平民黨之間〔NB 119 ページには「東亜同盟会を組織するために」の句が入っている〕、首得章炳麟先生、及張繼景梅九諸人、爲之唱〔NB 119 ページには「この組織化は、まず何よりも章炳麟、張繼景、梅九の賛同を得た」とあるが、これは明らかに訳者の誤り。また TP 122 ページには、章炳麟の名前のあとに括弧で「この人は民報主任にして中国の大革命家である」との注が付されているが、これは原文注か訳者注か判然としない〕。繼則朝鮮趙君素昂（原文割注：此人常在美洲識阮愛國）、印度帶（帶）君〔TP 122 ページは「インド人 Đái 氏」とし、

NB119 ページは「インド人 Đói 氏」とするも、ともに「帶」の漢越音である〕、菲律賓賓恒君〔TP 122 ページは「フィリピン人 Dát 氏」とする。これには「恒」の字があたる。しかし NB 119 ページは「フィリピン人 Hàng 氏」とする。これには「恒」の字があたる。NB 版の底本が、この字を用いていたのか、あるいは原本には「恒」とあったのを、訳者が誤読したのか、いずれかであろう〕（以下原文割注：此二人皆歐文姓名、余忘記）〔この割注は NB には欠〕、及同志數十人、皆附和之。而日本大杉榮^ニ利彦宮崎滔天等、十餘人〔TP 123 ページは「張氏、章氏と、日本社会党に属する10余人、つまり大森栄、堺彦、宮崎滔天など」とする。ただし「森」(sâm)は、本来「杉」(sam)とすべきところであろう〕（原文割注：大杉榮利二氏、爲日本社会党之領袖也）〔この割注は、TP、NB ともに欠〕、尤同情。以戊申年（1908年）十月、組成東亜同盟會。我國人爲會員者、潘是漢（原文割注：余之別名）、鄧子敏〔TP 123 ページは Đặng Tử Mẫn すなわち鄧子敏とするも、NB 119 ページは Đặng Tử Kinh すなわち鄧子敬とする。ともに東遊運動に加わった実在の人物であり、しかも別人である〕、阮琮林等十餘人〔TP 123 ページには「10余人」とする代りに「ほかに多くの人々」とある〕、此會成爲聯絡東亜之胚胎、然余頗含有希望〔HXXH 所蔵本；NB 1957: 118-119; TP 1956: 122-123〕。

このあとに、『年表』は、「滇桂越連盟会」（Điên Quê Việt Liên Minh Hội）の結成¹²⁾などについて言及し、さらに「東亜同盟会」の解散について、以下のごとく述べている。

不謂敵彊我弱、力薄援孤、百諸邦圖皆等於戲。東亜同盟會成纔數月〔TP 124 ページ、

何よりも最初に全亜の志士およびアジアの亡国諸民族と連結し、何とかひとつの党に団結せしめ、かくして同時に革命を行う時期を待つ。NB 117 ページによれば、「最初の段階では全アジアを連合し、亡国の志士を団結せしめ、各民族が革命舞台にともにあがるべきだと私は考えた」、而一方面則專以革命主義宣傳爲亡國辰期中之教育〔HXXH 所蔵本；NB 1957: 117; TP 1956: 121〕。

12) 「滇桂越連盟会」の詳細については白石 [1981a: 53 以下]。

NB 120ページはともに「5カ月」と記す], 因會中皆英法革命黨, 而朝鮮革命黨, 日本社會黨尤爲日政府所深嫉者 [NB 120 ページには「朝鮮革命黨」が欠], 英法 政府又 懲惡之, 這會遂爲日警官嚴令解散 [HXH 所藏本; NB 1957: 120; TP 1956: 124]。

つまり『年表』によれば, 「東亜 同盟会」は, 1908年陰曆十月にファン・ボイ・チャウの主唱のもとに結成され, それから数カ月後 (NB, TP によれば5 カ月後) に, 日本当局によって解散されたということになる。

「東亜同盟会」に関するチャウのこのような記述に対して, 他方の「亜洲和親会」は, どのような組織として記録されているのであろうか。「和親会」に関する 基本的な情報源は, 竹内善作 (善朔) の回顧談 [1948] である。それによると, 「和親会」は「明治 四十年 (1907 年) の夏頃から, 東京で章太炎, 張繼, 劉光漢」などの間に「だんだん協議がすすめられて」できたものである。その母体となったのは, 「社会主義研究会」である。これは, 張と劉を中心として1907年6月に組織されたもので, 8 月からは幸徳秋水たち日本人社会主義者を招いて講演を依頼した。このような活動の基礎の上に, 張と劉の「熱心」なる「提唱」によって, 「上置き」¹³⁾ に章炳麟 (太炎) を立てて, 「亜洲和親会」が設立されたのである。「和親会」の「宣言書」は, 同年 秋に章の名で執筆された [同上: 74-76]。

会の「約章」¹⁴⁾ によれば, 「凡そ会員は須

13) 「亜洲和親会約章」[竹内 1948: 78] によれば, 「会中, 会長幹事の職無し, 各会員皆平均利権あり」とあるので, この場合の「上置き」とは正式の会長といったものではなく, 実質上の中心的統轄者といったほどの意味であろうか。

14) 竹内善作の回顧談の中に紹介され [竹内 1948: 77-78], それをもとに補筆した口語体

らしく毎月聚会一次たるべし」とある [同上: 78]。第1 回会合は, 東京青山の「インディアン・ハウス」で行われた。これは, 「ミスター・デー」と呼ばれるインド人を中心に, 6, 7 人のインド人が合宿していた場所である。出席者としては, 中国人, インド人以外には, 日本人がいた。日本人として竹内のあげている人々は, 竹内自身, そうして堺利彦, 山川均, 守田有秋である。しかし竹内によれば, 幸徳秋水は「たしか出席していなかったと思います」という [同所]。

第2 回の会合は, 赤司繁太郎が牧師をしていた九段下の「ユニテリアン教会」で開かれた, と竹内はいう [同所]。この教会は「ユニヴァサリスト会堂」とも呼ばれており, 日本の社会主義者もしばしばここを集会場に用いていた。¹⁵⁾ この第2 回会合に出席した日本人として竹内のあげるのは, 竹内, 堺以外に, 森近運平, 大杉栄である。また, この第2 回の会合にはベトナム人, フィリピン人も参加していた。すなわち竹内によれば, 「安南の革命党, これは越南王の叔父さんにあたる人, それから四, 五人の青年達でいずれも中国人を装って留学していた」人々であるという [同所]。ここにいう「越南王の叔父」とは,

のものが西 [1977: 106 以下] に収録されている。

15) 「堺利彦略年譜」も「九段ユニテリアン教会」と記している [『堺利彦全集』 第6 卷515] が, 『大阪平民新聞』では一貫して「東京飯田町なるユニヴァサリスト会堂」[6 号 (1907. 8. 20 付): 「社会主義夏期講習」] とか, 「九段 阪下ユニヴァサリスト会堂」[8 号 (1907. 9. 20 付): 第3 回「金曜講演」の広告記事] と呼んでいる。「金曜講演」の1~4 回の会場は, ここに設けられた。ちなみに赤司繁太郎は『ユニヴァサリスト』という定期刊行物を出版していた。これは, 『大阪平民新聞』[8 号 (1907. 9. 20 付)] 「新刊紹介」欄や『世界婦人』[6 号 (1907. 3. 5 付)] の広告に, 「進歩的基督教の機関」として紹介されている。

明らかに阮朝皇族のクォン・デ (Cường Đức) のことである。次に、フィリピン人に関しては、竹内は単に「一・二のフィリッピンの同志」と記しているのみである〔同所〕。

このほか竹内の回顧談で注目を惹く点は、朝鮮人の不参加について、彼が再三言及していることである。すなわち、「不幸にして朝鮮の人々は一人も見えなかった」〔同所〕、あるいは「私の知っている範囲では、朝鮮の人々はこれに当時参加しなかったのであります。それは日本人が出席するならばわれわれは出席しない、という建前をとっておったのであります。私は第二回のこの会合の際そういうことを中国の同志からきいたことがあります」〔同上：76〕というのが、それである。

竹内が会合参加者について具体的に述べているのは、この第2回会合までである。このことは、彼が第3回以降の会合に出席しなかったことを意味するのか、あるいは単にこの回顧談の中で言及しなかっただけのことなのか判然としない。しかし、竹内はその回顧談後半の雑談的な部分の中で、さらに中国人の参加者として汪兆銘〔同上：78-79〕、閻錫山〔同上：90-91〕などの名前もあげている。¹⁶⁾

この「亜細亞和親会」の会合は、竹内によれば、翌1908年2月ごろに張継が日本を立ち去ったことを主な原因として、「いささか挫折」し、「アジアの革命党を打って一丸とすることろみが成就しなかった」という〔同上：79〕。たしかに張継離日後も、「われわれとの連絡は劉光漢によって繋がれた」〔同所〕という（ただし、このことが、「和親会」の組織としての存続を意味するのか、単に日本人

と中国人の連絡が持続したことを意味するのかは、文脈上からは不明である）。しかしいづれにせよ、「劉は組織力に於ても統率力に於ても到底張継の比ではなかった」とある〔同所〕ので、活動はじきに停止したとみなしてよいであろう。

以上のファン・ボー・チャウの「東亜同盟会」に関する回想と、竹内善作の「亜細亞和親会」に関する回顧を比較してみて、一見して明白なことは、第1に、両者の参加メンバーの共通性と、第2に、両者の活動期間の食い違いである。第2の問題は次節において検討することとし、本節では、まず第1の問題について以下に検討を加えてみたい。

この点に関してまず確認しておくべきことは、チャウのいう「東亜同盟会」には、中国、インド、ベトナム、フィリピン、朝鮮の在日活動家、そうして日本の社会主義者が参加したとされるのに対して、竹内のいう「亜細亞和親会」の参加者もほぼ同様の構成となっていることである。ただし竹内の言によれば、朝鮮人は日本人と同席しないとの建前をとっていたといい、この点チャウが朝鮮人の参加を明示しているのと食い違う。しかし「和親会」の「約章」そのものには、「中国、ボンベイ、朝鮮、フィリピン、ヴェトナム、イギリスなどの各地に、手紙の到着、発送のための場所を定める」（傍点引用者）〔同上：78〕とあって、明らかに朝鮮人の参加が想定されている。また「和親会」の事実上の政治的マニフェストと称しても差支えのない劉光漢（劉師培）の「亞洲現勢論」〔『天義』11・12合冊（1907.11.30付）〕¹⁷⁾においても、インド、フィリピン、ベトナム（原文では安南）とともに、朝鮮にも等分の関心が払われていた。また、やはり「和親会」の活動を念頭におい

16) 糸屋寿雄氏〔1950：200〕はさらに胡漢民、宋教仁、馬宋豫の名前をあげている。糸屋氏は竹内善朔（善作）に直接会っているようであるから、これは竹内からの情報かもしれない。

17) 邦訳としては丸山松幸訳（西〔1977〕所収）および小島晋治訳（小島〔1978〕所収）がある。

て書かれたと思われる幸徳秋水の「病間放言」¹⁸⁾にも、「支那」，「印度」，「此律賓人」，「安南人」とともに，「朝鮮人」への関心が示されているのである。そもそも竹内が朝鮮人の会合不参加について再三指摘するのは，裏を返していえば，「和親会」に彼らの参加がもともと予定されていたからにほかなるまい。恐らく朝鮮人は何らかの形で（例えば，日本人の出席しない会合には参加するといった形で），この組織に関与していたと考えるべきであろう。

さてそれでは，個々の参加者の具体的な検討に移ろう。基本的には，チャウが『年表』の中にあげる「東亜同盟会」の参加者と，竹内が示す「亜洲和親会」の参加者とは，合致する部分の方が多い。双方に共通に名前のがっているのは，中国人としては章炳麟，張継である。日本人としては大杉栄，¹⁹⁾ 堺利彦があげられる。またインド人に関しては，竹

内は「ミスター・デー」をあげ，チャウは「印度人帯君」をあげる。インド人「帯氏」の名前は，章炳麟の『民報』[20号（1908. 4.25付）]の時評「印度人之觀日本」や「印度人之論國粹」などの文中にも登場している（本稿351, 357ページ参照）。「帯」は中国語ではDàiの発音となるので，竹内のいう人物と同一とみなして問題はないであろう。なおチャウの『年表』には，インド革命党の「黨魁帯君」との接触について言及した箇所がある[HXXH所蔵本；NB 1957：146；TP 1956：151]。ここにいう「帯君」も前に述べたところのチャウのいう「帯君」と同じとみてよいであろう。²⁰⁾

フィリピン人について，チャウは具体的に「恒君」（NBでは「恒」君）の名をあげる。「恒」は中国語ではDá，もし「恒」とすればHéngの発音となるが，いまのところ，この人物の詳細についてはわからない。他方，竹内の回想には，「一・二のフィリッピンの

18) 『高知新聞』(1908. 1. 1付) 初出。『幸徳秋水全集』[第6巻]に再録。たしかに竹内によれば，幸徳秋水は「亜洲和親会」に出席していなかったようであり，またチャウの『年表』にも名前がない。しかし，もしも幸徳がこの組織に直接参加していなかったとすれば，それは同組織の活動期間に，彼がちょうど土佐中村に病氣静養のために帰郷していたからにほかなるまい。彼の東京出発は1907年10月27日，帰京は1908年7・8月ごろのことである[『幸徳秋水全集』第6巻「日記」；別巻2「年譜」]。彼がこの会に関心を払っていたことは，土佐中村に同会の「規約」が残っていたこと（本稿346ページ）からも，明らかであると思われる。

19) ただし，大杉栄は，1907年5月28日にクロボトキンの「青年に訴ふ」の翻訳で新聞紙条令違反に問われて，禁錮3カ月の判決を受け，さらに巢鴨入獄中に「新兵諸君事件」の判決で禁錮4カ月が決定し，引き続き獄中にあった[『大杉栄全集』第3巻「年表」]。彼の出獄は1907年末のことと思われる。

ちなみに「屋上演説事件」で再入獄していた1908年1月28日付の堀保子宛獄中書簡によれば，「出てからまだ二た月とも経たぬうち

に，又，おわかれになろうとは」との一節がある[同上書：第4巻407]。また『天義』によれば，彼は「社会主義講演会」の11月第2日曜の会合に来演している（注36参照）。本稿で指摘するように，「亜洲和親会」=「東亜同盟会」とし，その設立時期を竹内善作の証言するように1907年秋のこととするならば，大杉は同会の設立当初には，まだ獄中であつたことになる。大杉の参加は，彼の出獄後，すでに設立されていた「和親会」に遅れて合流する形をとったと解すべきであろう。ちなみに竹内の回想によれば，大杉の出席は「和親会」の第2回の会合であつて，第1回の会合には出席していなかったようである。思うに第1回の会合は，大杉の出獄以前に開催されていたのであろう。

20) ただし，NB 146 ページはDèとするも，TP 151 ページにはDèとなっている。Dèには帝，帯の双方の漢字が該当する。TPにいうDèはDèの誤記とみなすべきであろう。なお，帯の中国語発音はDìである。インド人「帯氏」と中国人の接触については，小島[1978：78]，丁[1957：26以下]をも参照されたい。

同志」とあるのみで具体的な名前をあげていないが、やはりフィリピン人の参加を証言している。

ベトナム人に関しては、チャウの回想録では、潘是漢 (Phan Thị Hán) すなわちチャウ自身以外に、ダン・トゥ・マン (Đặng Tử Mãn, 鄧子敏) ないしはダン・トゥ・キン (Đặng Tử Kính, 鄧子敬), そうしてグエン・クイン・ラム (Nguyễn Quỳnh Lâm, 阮琮林) ら10余人の参加が指摘されている。他方、竹内の方は、「越南王の叔父さんにあたる人」すなわちクオン・デと、4, 5人の留學生の参加を指摘している。チャウの方が自分たちの組織の盟主であるクオン・デに言及していないのは、やや奇異に感ずるが、その点を除けばチャウと竹内の回想に矛盾点はない。

これ以外の日本人、中国人参加者については、チャウの回想のみに名前のみえるもの、逆に竹内の回想の方にのみあがっているものがあり、若干の異同がある。ただし、この点についてまず指摘しておくべきなのは、チャウも竹内もその回想の中で参加者全員の名前を網羅的にあげているわけではないのだから、そのような異同をもってしてただちに矛盾と呼ぶことはできないということである。

チャウの方に名前があがっており、竹内の回想の方には出てこない中国人のひとり、景梅九である。景梅九自身の回想録『留日回顧』²¹⁾によれば、彼は1904年に留学のために渡日している。彼は在日期间中に中国同盟会に参加した最初の山西省人であり、また山西同郷会の会長を務めていたこともあった [景 1966 : 89-90]。彼はまた1907年になると、日本の社会主義者の運動に関心をもち始めて無政府主義に傾倒し、幸徳秋水らの講演会に参加したり、大杉栄にエスペラント語の教示

を受けたりしている [同上書 : 112-124]。同時に彼はまた、中国人の「社会主義研究会」のメンバーとなっている [同上書 : 125-144]。この組織は上述の通り、張継や劉師培などを中心とする組織であり、「亜洲和親会」の母体となったものである。つまり景梅九が張継や劉師培たちのグループの一員であったことは明白である。

他方、竹内の回顧談のみにあって、チャウの方には出てこない主要な中国人としては、劉光漢があげられる。竹内善作は劉光漢について、「これは後年 劉思復あるいは劉師培と称した人」 [竹内 1948 : 74] と述べているが、劉思復と劉師培は実際には別人であり、光漢はこのうち後者の号である。²²⁾ 劉師培は、1907年陰暦正月に来日している [森 1978 : 162]。そうして彼は、上に紹介した竹内の回顧談からも明白な通り、このころ章炳麟や張継と思想的に近く、また常に行動をともにしているのである。また、チャウの『年表』においては劉師培 (光漢) の名前に言及されていないものの、彼が劉と1907年には面識のあったことは、後者の「亞洲現勢論」 [『天義』 11・12合冊 (1907. 11. 30付)] の記述からも窺われる [小島 1978 : 86-87]。しかるに『年表』の中で、チャウが劉に言及しなかったのは、竹内善作の述懐するごとく、劉が組織力や統率力に欠ける人物であって、あまり目立たなかったためかもしれない。あるいは、チャウが中国革命党の動静に詳しく、劉の後日の変節を知っていたために、あえて言及しなかったのかもしれない。

竹内の回想のみに登場する中国人としては、

22) ちなみに蔡元培「劉君申叔事略」 [『劉申叔先生遺書』] 冒頭部分に、「君名師培，申叔其字也，又名光漢，別號左龢」とある。これに対して劉思復は劉師復とも称し、香港、広東で活動していた別人のアナーキストである [スカラピーノ ; ユー 1970 : 73-75]。

21) 景梅九 (定成) の自伝『罪案』の部分訳。なお、波多野 [1973] をも併照されたい。

ほかに汪兆銘と閻錫山があげられる。閻錫山は、外務省外交史料館文書[a]によれば、1906年に振武学校を卒業して第8師団に入隊、1907年暮に日本の士官学校に入学、1908年暮にそれを卒業してただちに見習士官となっている。これよりみると、彼は1907年から1908年にかけて東京に滞在（士官学校在学）していたこととなる。一方、汪兆銘に関しては、『國父年譜』によれば、1907年6月には香港にあり、以降孫文の意を体して1908年末まで東南アジア各地で金策に奔走していたらしい（『國父年譜』1964：217-219）。この間日本に立ち戻ったことがあったのかもしれないが、竹内のいう1907年秋からの「和親会」の会合や、チャウのいう1908年冬（それが正しいとして）からの「同盟会」の会合に出席し得たのか疑問が残る。

竹内の回想にあがっていて、チャウの方には具体的な名前が出てこない日本人としては、竹内善作（善朔）自身を初め、森近運平、山川均、守田有秋などがいる。しかし、彼らはおしなべて、大杉や堺と同じく幸徳秋水のグループに属する活動家たちであった。²³⁾

チャウの方に名前があがっていて、竹内の回顧談には登場しない日本人として注目するのは、宮崎滔天である。宮崎は幸徳秋水たちと接触はあったものの、その社会主義者グループの一員とはみなせない（この点、チャウの『年表』の記述が、宮崎を日本社会党の一員と考えているようにとれるのは興味

深い）。また何よりも『宮崎滔天全集』をみる限り、彼自身には「同盟会」ないしは「和親会」に関与したことを示す言及はみあたらないと思われる。しかも彼は1907年8月31日から、片山潜主宰、労働奨励会派遣の関西・九州巡業に出立し、同年末の12月22日ごろまで東京に戻っていないのである（『宮崎滔天全集』第5巻「年譜」）。もしも「東亜同盟会」が「亜洲和親会」と同一組織であって、しかも本稿で主張するように、その成立時期が1907年秋ごろのことと仮定すると、宮崎滔天がその設立当初からの参加者であったとはみなせないこととなる。上述のごとく、チャウの『年表』にあっては、宮崎の「^ア聯絡世界之思想」に共鳴したことが、チャウの「同盟会」参加の重要な契機となっているだけに、この点は気にかかる。なお、ちなみに、チャウは宮崎と、1905年と1906年にそれぞれ1度ずつ面談したことがある。その後1907年末になって再会見を希望したが、上述のごとく宮崎が地方巡業中だったために果たせず、12月26日付で、会見したい旨の書簡を送っている。3度目の面談が、宮崎の帰京後に実現したか否かは、いまのところわからない。²⁴⁾

以上にみてきたように、若干の疑問点（特に汪兆銘や宮崎滔天の場合）は残るものの、参加メンバーに関する限り、チャウのいう「東亜同盟会」と竹内のいう「亜洲和親会」は共通点が多く、矛盾点はほぼないといつてよいのである。

次に、名称をめぐる問題について言及しておく。小野川秀美氏は、「亜洲和親会は東亜亡

23) 幸徳秋水派の社会主義者については、堺利彦「社会主義運動史話」〔『堺利彦全集』第6巻251-253〕、同「日本社会主義運動小史」〔同上書：第6巻330-332〕、山川〔1961：247以下〕、糸屋〔1967：229以下〕、森長〔1968：567以下〕、秋山〔1968：1章〕、神崎〔1971：256以下〕、田中〔1971：239以下〕、松田〔1963：36以下〕、および『日本平民新聞』〔12号（1907. 11. 20付）；13号（1907. 12. 5付）〕消息欄などを参照されたい。

24) 本稿では詳細を省くが、『年表』における記載〔HXX 所蔵本；NB 1957：117；TP 1956：120-121〕、宮崎滔天宛のチャウの書簡〔『宮崎滔天全集』第5巻691〕、『革命評論』〔2号（1906. 9. 20付）：「編輯日誌」〕の記載などを勘案して得た結論である。

国同盟会とも呼ばれていたようである」と述べている〔小野川 1975: 360〕。その典拠は、張篁溪の「光復會領袖陶成章革命史」に求められる〔同上書: 365注25〕。いまその原文をみると、丁未(1907年)秋「更與樊光結印度、安南、緬甸、諸志士、在日本東京設立東亞亡國同盟會、擁章太炎爲會長。冬、在青風亭、偕張繼等講演、提倡社會主義」〔張篁溪 1957: 524〕とある。また、張玉法氏の著書も、中国の革命団体を示した一覧表の中に「東亞亡國同盟會」を記載しているが〔張玉法 1975: 637〕、その典拠も同じく張篁溪の文章である。さて、この「東亞亡國同盟會」は、ビルマ(緬甸)の志士云々と述べている点に疑問は残るものの、章炳麟を中心とする組織にして、かつインド、ベトナム(安南)の志士を糾合していた点や、1907年に東京で設立されたとしている点などにおいて、竹内のいう「亜洲和親会」と重なる。ちなみに陶成章は、章炳麟の光復会系に属し、孫文、黃興あるいは「新世紀社」のグループとは対立していた〔久保田 1976: 421以下; 永井 1974: 13〕。とするならば、竹内のいう「亜洲和親会」は「東亞亡國同盟會」とも呼ばれていたこととなり、名称の点でもチャウのいう「東亞同盟会」とつながるのである。

さらに糸屋寿雄氏は、「亜洲和親会」のことを「東亞和親会」と呼んでいる。彼は幸徳秋水の郷里土佐中村を訪れた時、この「東亞和親会」の規約が保存されてゐたのを見ていう〔糸屋 1950: 199-201〕。同じく平野義太郎氏も、その典拠は定かではないが、「亜洲和親会」とともに「東亞和親会」なる呼び方をも用いている〔平野 1955: 146以下; 1966: 15以下〕。²⁵⁾ このように「亜洲和親会」が「東亞和親会」とも呼ばれていた

のが事実とすれば、ここでもチャウのいう「東亞同盟会」との名称上の類似性が注目される。²⁶⁾

II 活動期間

前節にみたごとく、チャウのいう「東亞同盟会」と、竹内のいう「亜洲和親会」を、同一組織であると比定するための最大の問題点は、その活動期間の食い違いにある。チャウは「同盟会」の成立を1908年陰曆冬十月(陽曆で10月25日-11月23日)のこととし、日本官憲によるその解散を、それから数カ月後(NB, TPでは5カ月後)のこととする。これに対して竹内は、「和親会」の成立を1907年秋ごろのこととし、翌年の初めには活動を停止したとみなす。そこで本節では、まずチャウの『年表』という活動期間が、果たして妥当であるか否かの検討から始めることとしたい。具体的には、『年表』に言及されている人々の中で、その略歴の判明する中国人、日本人のいく人かについて、果たして1908年陰曆冬十月ごろにどのような状況にあったかを考察する。

『年表』に名前のあがっている中国人3人のうち、まず張繼についてみる。彼は1908年陽曆1月17日にいわゆる「屋上演説事件」に関連し、警察当局からの追及を恐れて、1月ないしは2月ごろに日本を離れパリに赴いている〔永井 1968: 57; 小野川 1975: 364〕。同事件は、日本の社会主義者の主宰する「金曜講演」が中止解散命令を受けたことに端を発して、その参加者が官憲と衝突した

26) 波多野太郎氏も、「社会主義研究会」は「後に東亞研究会に発展することとなった」と記す〔波多野 1973: 9〕。その依拠資料は明示されていないが、ここにいる「東亞研究会」が「亜洲和親会」に相当するものであるとするならば、ここでもその名称に冠された「東亞」なる語に注目しておいてよい。

25) 田中惣五郎氏〔1971: 337〕も「東亞和親会」としている。

事件であり、6人の検束者を出している。張継はこの時危うく逮捕されるところであった。²⁷⁾ 当時彼には清朝政府から懸賞金がかけられていたとの情報もあり [『日本平民新聞』21号 (1908. 4. 5 付) : 「張継君を懐ふ」; 山川 1961 : 304], 身の危険を感じていたのである。

いまひとりの景梅九は、1908年には、創設されたばかりの「震旦公学」²⁸⁾ の教員となるために、中国に帰っている。彼の『留日回顧』によれば、「震旦公学」のある青島に立ち寄ったあと、北京、太原を経て故郷の山西に戻った。彼はその年の中秋 (八月十五日、すなわち陽暦9月10日) を太原で迎えている。また山西滞在中に彼は再婚し、その直後に光緒帝と西太后の死亡する事件 (陽暦11月) があったという [景 1966 : 145-150, 158]。彼が再度日本に渡ったのは、大逆事件の裁判が進行中の1910年のことであった [同上書 : 174-186]。つまり彼は、1908年前半期以降1910年まで、日本には滞在していなかったこととなる。

次に日本人についてみると、大杉栄、堺利彦は、他の同志4人とともに、上述1908年1月17日の「屋上演説事件」で検束されている (注27参照)。²⁹⁾ 『日本平民新聞』[17号 (1908. 2. 5 付) : 15面; 18号 (1908. 2. 20

付) : 3面] によれば、彼らは1月17日に本郷警察署に拘引され、19日東京警視庁、20日東京監獄に押送され、2月上旬に堺、大杉と山川均に1カ月15日の軽禁錮が言い渡されている。彼らの出獄は3月26日のことである [同上新聞 21号 (1908. 4. 5 付) : 14面]。しかるに堺、大杉は12人の同志とともに、同年7月22日の「赤旗事件」³⁰⁾ で再び検挙されている。主謀者格の大杉には2年6カ月の懲役、堺には2年の懲役と、ほかに余罪として2カ月の軽禁錮が課された。彼らは9月に千葉監獄に押送され、そこで刑に服した。³¹⁾ 堺の出獄は1910年9月22日 [『堺利彦全集』第6巻「年譜」], 大杉は同年11月29日 [『大杉栄全集』第3巻「年表」] のことである。

以上みてきたように、チャウが『年表』の中にあげた人々のうち、張継と景梅九は日本国外にあり、大杉栄と堺利彦は獄中であって、ともに1908年陰暦十月あるいはそれ以降の時期に、活動に参加できる状態にはなかった。つまりチャウの『年表』における「東亜同盟会」に関する記述に関して、活動時期と参加メンバーは両立し得ない。ところでチャウのいまひとつの回想録『獄中書』の

27) 詳しくは守田有秋「金曜講演迫害記」[『日本平民新聞』17号 (1908. 2. 5 付)]; 堺利彦「日本社会主義運動における無政府主義の役割」[『堺利彦全集』第6巻299]。なお『熊本評論』(1908. 2. 5 付) によれば「張継君は一旦同志に救はれて其場を遁れたるも、此頃京都にて捕はれたり云ふ」[田中 1948 : 364] との情報もあるが、これは誤報のようである。

28) 1908年春、青島に設立。山東省の重要な革命宣伝機関となった [張玉法 1975 : 683; 『國父年譜』1964 : 248]。

29) その公判の模様と判決については田中 [1948 : 361-363]。

30) 「赤旗事件」に関しては、堺利彦「社会主義運動史話」[『堺利彦全集』第6巻238-239], 同「日本社会主義運動における……」[同上書 : 第6巻303-304], 同「赤旗事件の回顧」[同上書 : 第3巻425-430], 山川均「ある凡人の記録」[山川 1961 : 311以下], 『大杉栄全集』[第3巻「年表」], 田中 [1948 : 462] などを参照されたい。

31) 山川均「ある凡人の記録」[山川 1961 : 313] によれば、「私をのぞく被告の全部は一審で服罪して千葉監獄に送られたが、私は家のあと始末などの必要から一たん控訴し、まもなく控訴を取り下げて服罪した。たぶん秋の初めごろだったと思う、二十人ばかりの囚人たちといっしょに、千葉監獄に護送された」とあるので、大杉、堺が判決後ただちに千葉監獄に収監されたことがわかる。『堺利彦全集』[第6巻「年譜」] によれば、堺の千葉監獄への押送は1908年9月となっている。

中では、前掲のごとく（本稿 338 ページ）、「東亜同盟会」に関してその成立時期が明示されていない一方で、同組織と張継の結びつきは非常に明確な形で示されている。つまりチャウの記憶において、「同盟会」と張継は切り離し難いものとなっている。この点をも勘案すると、「同盟会」の成立時期は、『年表』のいうごとく 1908 年陰暦十月のこととはみなし難く、その時期は、実際には 1908 年 1・2 月の張継の離日以前のことであったとしなければならないこととなる。

とするならば、チャウが『年表』において、「同盟会」結成の背景として説明を加えている部分にも、その妥当性に関して再検討を加えなければならなくなる。彼の回想においては、「同盟会」の結成は、1908 年陰暦九月の学生解散の命令 → チャウの日本への失望と、中華革命および世界の「同病」の諸民族への関心の移行、といった一連の事件の文脈の中で捉えられている。しかも彼は、このような日本当局によるベトナム人組織弾圧の背景として、1907 年 6 月の日仏協約の締結と、それがその後の日・仏両当局の関係に及ぼした影響を強調している。³²⁾

チャウの『年表』における、このような因

果関係の説明は、本稿の「はじめに」の部分でも指摘したように、いままでのベトナム史研究者によっても、そのまま踏襲されてきた。しかし、このような評価の根拠は、本節にみてきたように否定されなければならない。つまり「同盟会」の成立は、1908 年陰暦十月のこととは考えられず、少なくとも張継の離日する 1908 年 1・2 月以前のこととしなければならない。他方、日本当局による在日ベトナム人への干渉が本格化するのは、1908 年後半期あるいは 1909 年初めのことである。³³⁾

にもかかわらず、『年表』の中で、チャウが事実とは逆転した因果関係を提示しているのは、なぜであろうか。理由としては、ふたつの可能性が考えられよう。そのひとつは、彼が本当にそのように記憶していた可能性である。またひとつは、彼が意図的に時間的順序を逆にした可能性である。もし前者とすれば、彼にとって、その記憶をねじまげるほどに、日本当局の弾圧の衝撃が大きかったことを意味しよう。また後者とすれば、それだけ日本当局による弾圧に対する彼の失望感が大きかったことを強調したかったからにほかなるまい。

さて以上に指摘してきたごとく、「東亜同盟会」の活動期間に関して、チャウの『年表』における記述は、事実と合致しない。しかも、その成立時期は、1908 年初頭以前のこととしなければならない。とするならば「東亜同盟会」は、竹内のいう「亞洲和親会」と同一組織であって、しかもその活動時期は竹内のいうごとく 1907 年秋ごろのことであるとみなす蓋然性はますます強くなったというこ

32) 『獄中書』には、フランスは「同時に日仏協約の関係上、日本政府に交渉して、わが党の首魁引渡しと留日学生団の解散を要求しました」とある〔潘 1966: 141〕。また『年表』には、1908 年のサイゴンにおける連絡要員の逮捕の一件に続けて、「會日法協約成、交外情勢一變、法有所求日人皆曲徇之」とあり、ついで日本当局による東亜同文書院（実際には東京同文書院）内のベトナム人学生への干渉事件が記されている〔HXX 所蔵本；NB 1957: 101；TP 1956: 105-106〕。また同じく『年表』の 1909 年陰暦二月の記載にも、「圻外（畿外侯疆樞のこと）與余同辰被日政府逐出境外之令。圻外限二十四小辰、而余則限旬日內、俱不得逾限滯留。蓋（蓋か）日法協約成立之影響也」とある〔HXX 所蔵本；NB 1957: 124；TP 1956: 128〕。

33) 『年表』によれば、1908 年の日本警察の東京同文書院内のベトナム人への干渉が、その最初である。日本の外務省外交史料館文書〔b〕によれば、日本当局のベトナム人組織の動静調査の開始は 1909 年初頭のことである。これについては長岡〔1966〕、川本〔1980〕を参照されたい。

とができる。しかし、竹内の証言をさらに補強するためには、日・中、その他のアジアの在日活動家たちが、実際に1907年秋ごろまでには相互の交流を深めていたことを確認する必要がある。けだし、彼らの交流の深化を前提として、初めて「和親会」の結成も可能となるからである。

日本の社会主義運動は、周知のごとく、1906年2月に創設された日本社会党が、1907年2月17日に第2回大会を開催した前後から、明確に分裂する。この大会で「直接行動論」を唱えた幸徳秋水らは、以降「折衷案派」の堺利彦や山川均たちと合流して、『大阪平民新聞』（1907年6月1日創刊、同年11月5日付の11号より『日本平民新聞』と改題、1908年5月20日休刊）を事実上の機関紙とした。他方「議会政策派」の片山潜、西川光二郎、田添鉄二らは、『社会新聞』（1907年6月1日創刊）に依拠して、これに対抗した。幸徳のグループは、「直接行動派」ないしは「左派」、「硬派」と呼ばれ、特に幸徳や大杉栄らは、この時期までに無政府主義へと傾斜していた（注23参照）。³⁴⁾ 1907年ごろから在日の中国革命家たちとの接触を深めたのは、この幸徳たちのグループである。

一方、在日の中国革命派の内部では、1907年に至って、章炳麟、張継、劉師培らと、孫文との対立が決定的となっている。これは、同年3月4日に日本政府から国外退去を勧告された孫文が、日本政府や日本人政商から独断で餞別金を受領したことが直接の契機となっている〔張玉法 1975：360, 474；『國父年譜』 1964：212以下；小野川 1975：341-342〕。しかし、両者の対立の淵源は、この事件以前からあったとみなすべきであろう〔張玉法 1975：358-359；久保田 1976：

420以下；森 1978：165；小野川 1975：340-342〕。孫文が日本を退去してから以後は、『民報』の編集上の主導権は、章炳麟のグループに握られた。³⁵⁾ しかも孫文は、潮州などでの一連の挙兵（1907年5, 6, 9月）にも失敗したので、その日本国内にある中国革命黨員への影響力を著しく減退した〔小野川 1975：342〕。このような状況下にあって、孫文に対立する章、張、劉らの在日グループは、このころより急速に無政府主義的な考えに傾いてゆく〔同上書：354-355；Bernal 1976：Ch. 7；永井 1968：67以下〕。このような無政府主義への傾斜で鍵となった人物は、張継であった。彼は、無政府主義に早くより興味を持ち、また幸徳秋水らと中国人の交流の端緒を開いた〔森 1978：165-166；永井 1968：67以下；小野川 1975：354-355〕。さらに、彼は弁舌にも巧みで〔山川 1961：310〕、組織力もあり〔竹内 1948：79〕、中国人の実際の活動の中心となった。そのみではない。彼はまた日本語も達者で、中国人の集会に参加した日本人社会主義者の講演を通訳したり〔山川 1961：310〕、日本人の集会で、中国人を代表して、日本語で演説したりもしている（本稿注37参照）。また張継は、個人的にも「ほとんど毎日のように」日本人社会主義者たちの家に来て、その「グループのメンバーみたいになっていた」〔同所〕という。

さて張継たちは、前述の竹内善作の回顧談にもあったごとく、1907年中半には「社会主義研究会」を組織した。また、8月末からは

35) 『民報』は1906年半ばより章炳麟が主編者となっている。途中張継（1907年暮）や陶成章（1908年初め）に交代したことはあったが、1908年11月の日本政府による「封禁」まで基本的には章の主導権のもとにあった〔張玉法 1975：385-386〕。このために『民報』は章たちの立場を反映し、ついには孫文派との激しい論戦の具とされるに至った〔同上書：479-484〕。

34) ただし「直接行動派」即無政府主義者と単純にみなすことには疑問がある〔飛鳥井 1968〕。

「社会主義講習会」と銘打った集会を定期的に開催するようになり、これに幸徳、山川、堺、大杉ら日本の社会主義者を講師として招いているのである。³⁶⁾ 8月31日の同講習会の第1回会合では、幸徳が「自由社会主義」すなわち無政府主義について講演し[『大阪平民新聞』8号(1907. 9. 20付):「東京の社会運動第二信」], またクロボトキンの「相互扶助」論などに言及している[狭間 1975: 76]。

また張継たちは、幸徳たちが1907年9月6日から始めた「社会主義金曜講演」にも、しばしば出席するようになっている。³⁷⁾ かくして、張継たち中国人が、幸徳ら日本人社会主

義者と、1907年半ばまでには極めて密接な交渉を持つに至っていた³⁸⁾ことが確かめられるのである。

次に、これら日・中の革命家と、インド人の接触をみる。³⁹⁾ 章炳麟は、「印度中興之望」[『民報』17号(1907. 10. 25付)]の中で、「嘗憶六年前在日本有印度人告余白」と述べているので、すでに彼が1902年に日本に2度目の亡命をしてきた折[小野川 1975: 296, 304]に、インド人と接触のあったことがわかる。しかし、その本格的なインド人との接触は、章の3度目の亡命(1906年夏)期間中、しかも1907年になってから開始されたものと思われる。彼は1907年4月20日に、

36) 『天義』報[6冊; 8・9・10合冊; 11・12合冊]の関連記事によれば、「社会主義講習会」の開催は、1回が1907年8月31日、以下2回(9月15日)、3回(9月22日)、4回(10月6日)、5回(11月第2日曜)、6回(11月第4日曜)。会場場所は2回が牛込区赤城元町江戸川亭のほかは、1回、3～6回が牛込区赤城元町清風亭。日本人講演者は、1回が幸徳秋水、2回が堺利彦であった。3回は山川均の予定であったが欠席。4回が山川、5、6回が大杉栄である。竹内善作[1948: 76]によれば、彼は明治42年(1909年)5月に講師として招かれたといっているが、これは明らかに1908年の誤り。しかし、いずれにせよ竹内の言葉を信ずれば、同講習会は1908年5月ごろまで存続していたこととなる。同講習会についての幸徳秋水の評価は『大阪平民新聞』[8号(1907. 9. 20付):「東京の社会運動第二信」]。山川均の回想は山川[1961: 309-310]。第1回会合における幸徳の講演内容については狭間[1975: 63以下]。また同講習会についての最もまとまった研究は永井[1968]。

37) 景梅九は、日本の社会党員の開催した「夏期講演会」に参加したと述べている[景 1966: 119-120]。これは、「社会主義金曜講演」に先立って、1907年8月1日から10日まで東京飯田町のユニヴァサリスト会堂に於て開催された「社会主義夏期講習」[『大阪平民新聞』6号(1907. 8. 20付):「時事」]のことである。これは、「直接行動派」と「議政政策派」の双方が協力した最後の活動となって

いる[山川 1961: 290]。しかし、景梅九の理解では「この夏期講習会は、金曜講演会ともいった」[景 1966: 120]とあり、あくまで幸徳派の活動の一環として扱っている。景は「金曜講演会」にも出席した[同上書]。「金曜講演」への中国人の出席については、『大阪平民新聞』[9号(1907. 10. 5付)]の幸徳秋水「東京評論第三信」に「聴衆中に二三の支那人あり」と記されている。また『日本平民新聞』[11号(1907. 11. 5付):「東京だより」]には、第6回の会合(10月11日)に「十数名の清国同志、両三名の印度同志も来会せられた」とあり、また「清国同志張継君日本語にて、印度同志ボース君英語にて(幸徳の帰省に対する)送眉の演説あり」としている。同紙[15号(1908. 1. 1付)]には堺利彦「金曜会の記(一)」が掲載され、それによると「又一方の壁に沿うては支那人が七八人と云ふ風で、印度人の一二人さへ之に加はる事がある」と記されている。

他方、中国人側の記録では『天義』[8・9・10合冊(1907. 10. 30付)]に「記東京金曜講演會」なる文章があり、その第3次(9月20日)、4次(9月27日)、5次(10月4日)、5次(10月11日)、6次(10月18日)、7次(10月25日)の会合の様子が伝えられ、その第6次会(於吉田屋)の項には「吾國張継君」の出席を伝えている。

38) また景梅九は、日本社会党主催の園遊会(於梅花園)に出席し、そこで幸徳秋水の演説などを聞いたあと茶話会となり、福田英子の一

在日のインド人が東京虎の門女学館で開催した「西婆耆^{シーヴァージ}記念会」に招かれ、数人の同志とともに出席している。これは、17世紀末に「蒙古帝国」の占領からインドを独立させた王を記念する集会であった。この会に先立って、その主催者たる「法學士鉢邏罕氏」がアメリカより来日し、章を「民報社」に訪ねて懇談したことがあった。その縁で章たちもこの会合に招かれたのである〔『民報』13号（1907. 5. 5付）：「記印度西婆耆王記念會

弦琴の演奏に感銘を受けている〔景 1966：128-129〕。福田は当時『世界婦人』（1907年1月1日創刊、1908年7月5日までに35号）を発刊しており、その愛人の石川三四郎とともに、幸徳たちとの行動に一線を描きつつも、やはり無政府主義に傾倒していた。福田、石川らと中国人との交流も密接なものがあり、また宮崎滔天や田中正造たちと独自の親交があったことでも知られる。中国人との交流に関しては、『世界婦人』2号（1907. 1. 15付）に「清国呉弱男女史より」の書信、13号（1907. 7. 1付）の「内外事情」欄には、劉師培およびその妻何震が組織した「女子復権会」とその機関紙『天義』に関する紹介がある。また10号（1907. 5. 15付）には「清国青年と語る」という興味深い文章があり、石川が入獄する前夜（1907年4月25日）に入獄、1908年5月19日に出獄〔村田 1958：124-125〕に、福田と石川が後者の下宿で、「清国二青年」と筆談した模様を伝えている。翌日入獄という時期に、2時間もの長時間にわたって初対面の「清国」青年と議論している石川たちの態度の真摯さに、まず敬服するが、さらにその議論の中で中国人青年たちに対して、順々に無政府主義を説いていることに興味をそそられる。また石川は、1908年暮の「民報封禁事件」の際、章炳麟の法廷付添人を引き受けている〔『石川三四郎著作集』第8巻261〕。また福田は、宮崎滔天の要請に従って、在日雲南省人の雑誌『雲南』の15号（1908. 11. 10付）以降の発行所の名義を貸している〔『世界婦人』27号（1908. 8. 5付）；白石 1981a：50〕。

- 39) 日本の社会主義者のインドへの関心、および「亜洲和親会」とインド人の関係を略述したものとして、大杉孝平〔1978：61-66〕がある。

事〕。40) また、章はこのインド人の友人として「保什氏」の名前をあげる〔同所；同上誌13号（1907. 5. 5付）：「附録送印度鉢邏罕保什二君序」〕。これは恐らく後述するスーレン・ボースのことであろう。41) ボースは、日本人社会主義者の会合にしばしば顔を出している人物である。

以降『民報』には、章炳麟の執筆になるインド関係の記事がしばしば掲載されている。42) それらの中で章は、インド人との交流の浅からぬことを記している。43) 特に『民報』[20号（1908. 4. 25付）]の「印度人之觀日本」の中では、「暇日インド人帯氏が余をおとずれた」と述べているが、これは上にみたごとく、チャウと竹内善作の両者が名前をあげているインド人と同一人物であると思われる。

40) 邦訳は島田〔1965：252-260〕に所収。

41) 「保什」の中国語発音は bǎo shí である。本稿352ページ、注37、45をも併照。

42) 本文351ページに引用した『民報』13号（1907. 5. 5付）のふたつの記事のほかに、17号（1907. 10. 25付）に「印度中興之望」、20号（1908. 4. 25付）に「印度獨立之法」（邦訳山田〔1970：174-175〕に所収）、「印度人之觀日本」（邦訳山田〔同上書：175-177〕、伊東他〔1974：82-84〕）、「印度人之論國粹」、「支那印度聯合之法」が太炎の署名で掲載されている（章のインド論については、丁〔1957〕、大八木〔1974〕参照）。

ほかに公侠ないしは公侠訳の記事として、21号（1908. 6. 20付）、23号（1908. 8. 10付）に「印度社會報」の紹介、22号（1908. 7. 10付）、23号に「印度自由報」の記事、23号、24号（1908. 10. 10付）に「印度母國萬歳報」の記事、24号に「印度柯來因報」の記事が載る。また臺山の署名のある「印度自由報」の記事が21号、南國行人訳の「婆羅 sāla 海濱遯跡記（南印度 Yhacua 述）」なる小説が22号に掲載されている。さらに章炳麟の手から編集が離れた26号（1910. 2. 1付）の巻頭「圖畫」には「印度革命黨丁格勞君」の写真が載っている。

43) 章炳麟と在日インド人との交流については、丁〔1957〕をも参照されたい。

る(本稿343ページ)。章炳麟のみではなく、劉師培もまた1907年中には在日インド人と接触のあったことが、その「亞洲現勢論」の記述[小島 1978:91]より窺われる。

インド人はまた、1907年秋までには、日本人社会主義者の主宰する「金曜講演」にもしばしば出席するようになっていた。⁴⁴⁾特に「印度の志士スーレン・ボース君」は、その席上でしばしば英語の演説を行っていた。⁴⁵⁾ただし、彼は11月13日には東京を発って米国に向かっている。この時「日本、支那、印度の革命党数十名」が彼を新橋に見送り、「日、清、英の三ヶ国語で東洋革命運動の前途を祝し合った」という[『日本平民新聞』12号(1907. 11. 20付):「東京だより」]。⁴⁶⁾

44) 注37に掲げた『日本平民新聞』[11号; 15号]の記事を参照されたい。また『日本平民新聞』11号[(1907. 11. 5付):「東京だより」]の別の項には、第7回「金曜講演」(1907年10月18日)で「守田氏の印度人を訪ひし話」のなされたことが記されている。「守田氏」とは守田有秋のことである。彼は竹内善作の回想によれば、「亞洲和親会」の会合にも出席している。注45, 46をも参照。

45) 注37引用の『日本平民新聞』[11号(1907. 11. 5付)]の記事、および『世界婦人』[18号(1907. 10. 1付):「社会主義金曜講演と婦人」]参照。後者には「去る二十七日第四回の講演(9月27日のこと)後、同夜来会の印度の志士スーレン・ボース君の演説あり、故国に於ける英国資本家政府の暴虐を説き印度革命の機近づけりと云へり」とある。『天義』[8・9・10合冊(1907. 10. 30付)]の「記東京金曜講演會」の記事中では、第4次会(9月27日)の項に「留印度保斯君以英語演説陳英人待印之苦況。由堺君通譯」と、同様の記述がみえる。また第6次会(10月18日)の項にも「印度波斯君。復以英語演説」とある。「保斯」の中国語発音は**bǎo sī**, 「波斯」は**bō (pō) sī**である。

46) この記事では、スーレン・ボースを「印度人の同志にして屢々金曜講演にて演説せし」人物として紹介している。

また幸徳秋水は「病間放言」(『高知新聞』1908. 1. 1付)の中で、「予は東京に在て多くの印度青年を見たり、彼等皆品格あり、氣慨あり、學術ある有為の革命家にして、談一たび故国民生の塗炭に及べば、深慨痛憤、次ぐに涕を以てす」と述べている[『幸徳秋水全集』第6巻383]。⁴⁷⁾

このようにして、「亞洲和親会」が発足したと竹内が証言する1907年秋ごろまでには、日本、中国、インドの在日の活動家たちの間に、親密な交流関係が形成されていたことが確かめられる。

さて次に、日本人、中国人と、これらベトナム、フィリピン、あるいは朝鮮の在日活動家との交流についても、確かめておこう。

劉師培の「亞洲現勢論」[『天義』11・12合冊(1907. 11. 30付)]には、「インド人某君」とともに、「ベトナム(原文では安南)人某君」、「朝鮮人某君」によれば、といった記述が再三出てくる。また朝鮮、ベトナム(安南)の「東京留学生と社会主義を論ずると、みな喜んで賛成する」とも記されている[小島 1978; 西 1977]。一方、幸徳秋水も「病間放言」(『高知新聞』1908. 1. 1付)の中で、「支那」、「印度」について論じたあと、「此律賓人、安南人、朝鮮人中、亦氣慨あり學識ある革命家、決して少きに非ず」と書き留めている[『幸徳秋水全集』第6巻383以下]。幸徳は1907年10月27日には東京を離れて、病氣静養のために郷里の土佐中村に戻っていたので(本稿注18参照)、彼がこれらの在日活動家を知ったのは、それ以前のこととしなければならない。なお、幸徳が再び上京したのは、翌1908年7・8月のことである。

47) これは、章炳麟の「印度中興之望」(注42参照)の文中の「余視印度人在日本者明允確堅嗜學不怠、未有如漢人之惰弛者」云々という評価と照応していて興味深い。

在日フィリピン人と日・中の無政府主義者の接触の契機を具体的に検討するためには、第1に、1899年ごろまでに遡り得る、フィリピン革命運動と中国革命家や日本のアジア主義者の接触との関連の有無、第2に、日露戦争以降の在日フィリピン人の動静、とりわけその政治的活動の有無、について考察する必要がある。しかし、この点については、筆者の詳らかにするところではなく、専門家からの指摘を待ちたい。

朝鮮人に関して、チャウが『年表』の中に言及している趙素昂が実在の人物であることは、朝鮮関係の邦語文献によって確認される。彼は李鏞殷とも呼ばれ〔徐 1970：24〕、明治大学に学び〔外務省アジア局 1960：236；外務省調査局 1950：110-111〕、1910年代には上海に拠点を置いて、海外朝鮮人の運動に従事した。また1919年の3.1独立運動に際しては、上海に設立された大韓民国臨時政府に参加し、同政府よりパリに派遣されている。⁴⁸⁾ しかし彼の1907年前後の活動については、いまのところ詳らかにし得ない。

在日朝鮮留学生一般の動向については、そ

の多くが日本に不満を抱き、「堺利彦、河上肇、大杉栄などの影響をうけ、出世を夢みて来日した青年が帰国のときには爆弾をだいて帰る、といわれたほどである」との指摘もある〔小沢 1973：43〕。また、在日留学生の組織化も1907年ごろまでには活発化していた〔朴慶植 1979：67以下〕。しかし、このような在日朝鮮人のグループが、具体的にどのように「亜細亞和親会」に関わったのかは、今後の検討に待ちたい。

次に、在日ベトナム人の場合をみる。彼らの中国革命派との接触は、1905年までに遡る。ファン・ボー・チャウが中国革命派の人物と出会った最初は、早くも1905年ベトナムを出国して、初めて日本に向かう途次の香港においてであった。彼はそこで馮自由と面談したという〔HXX 所蔵本；NB 1957：51-52；TP 1956：49-50〕。ただし、この時の馮との接触は、爾後の中国革命派との交流とは直接つながらない。渡日当初、チャウは

に設立された朝鮮社会党の代表として、1919年の第2回インターに出席した。これを機にサンフランシスコ在住の朝鮮人たちは、大韓労働社会改進黨を設立して、第2回インターに出席している李に資金を送ったという。したがって、全く在アメリカの組織と無関係であったということでもないらしい。なお、チャウの『年表』における割注の後半部分は「識阮愛國」となっているが、ゲン・アイ・クォク(Nguyễn Ái Quốc, 阮愛国)、すなわちのちのホー・チ・ミン(Hồ Chí Minh, 胡志明)と趙素昂が面識を持っていたとすれば、講和会議前後のパリにおいてであったと思われる。ゲン・アイ・クォクはたしかに1913年終りごろ、アメリカに短期間滞在していたことはあった〔The Lap; Thanh Nam 1981：8〕が、この時は彼がまだ反植民地主義の国際的な活動家として活躍し始める以前の時期であったから、この時のこととは思われない。なお、チャウがゲン・アイ・クォクと会ったのは1925年広東においてのことであったから、恐らくこの時に後者から趙の消息について伝え聞いたのであろう。

48) 外務省調査局〔1950：110〕によれば、1887年生れ。明治大学卒業後、朝鮮法学専修学校教員となったが、3.1独立運動以前から上海に奔り、大韓民国臨時政府に参加したという。趙〔1975：110-114, 132, 138-142〕によれば、彼は3.1独立運動開始前の2月に、在日留学生との連絡のために、上海より東京に派遣された。3.1運動開始後の4月には上海臨時議政院に出席し、國務院秘書長に選出されている。同年9月にパリ講和会議に派遣された。この折にスイスの第2インターナショナルの大会にも出席したとの情報もある〔外務省調査局 1950：110；「新東亜」編輯室 1980：112〕。彼はその後も上海に活動の本拠をおき続けたようである〔趙 1975：277-278, 308〕。したがって、チャウの『年表』の割注にいうがごとき、「常住在美洲」の事実はなさそうである。ただし徐〔1970：24〕によれば、李鏞殷(別名趙素昂)は、1917年

専ら「保皇党」の亡命政客梁啓超と接触し、彼から種々の忠告や示唆を受けることとなる。しかしそのことは、チャウが渡日の初期から中国の「革命党」との接触を全く持っていなかったことを意味するわけではない。

そのうちのひとつは、孫文との接触である。彼は孫文に、1905年夏ごろに犬養毅の紹介を受けて会っている。その犬養をチャウに引き合わせたのは、ほかならぬ「保皇党」の梁啓超という皮肉なめぐり合わせである。しかし、孫文とのこの時の2度にわたる会見は、結局物別れに終わっている。⁴⁹⁾ チャウはその後の日本滞在期間中に、孫文自身と再会する機会はなかった。

在日ベトナム人と中国革命党の接触として、より重要な意味を持つのは、第1に、雲南省留日活動家との接触である。これについては別稿において論じた[白石 1981a]。第2に、ベトナム人留学生と「民報館」の関係である。『年表』によれば、1905年陰暦冬の初めごろ、チャウたちは横浜に住んでいた。しかし、資金不足のために、狭い部屋に多人数が住み、しかも生活費にも事欠いていた。そこでルオン・ラブ・ニャム (Lương Lập Nham, 梁立岩)⁵⁰⁾ は、単身徒歩で、一昼夜をかけて東京に赴き、市内の「中華留学生の寓所」をあちこち「遍訪」した。つまり転

転と居候したのである。彼はこの時、たまたま「民報館」に立ち寄った。ニャムから事情を聞くと、「主筆」の章太炎と「管理」の張継は、これに大いに同情し、彼に「民報館」での「三等書記之役」を与えた。また横浜から何人かの「同患者」を連れてきて、止宿させることをも認めた。そこでニャムは横浜に戻り、幼少の実弟を横浜に残したまま、他の同郷の2青年を連れて「民報館」に「寄食」し、日本語を学習したという [HXH 所蔵本; NB 1957: 63-64; TP 1956: 62-63]。

この事件は、『年表』によれば、1905年陰暦冬の初めのことであったという。『民報』の創刊号は、1905年11月26日付で刊行されているので、その前後のことであったと思われる。しかも『年表』によれば、ニャムは上京に際して、その最初の晩を「警察署の門口」で眠ったというので、それが事実とすれば、厳冬にさしかかる以前のことであったということになろう。なお彼は、1906年4月には、寄宿舎のある振武学校に入学しているので [白石 1981a: 46], 「民報館」での「寄食」もそれ以前のこととしなければならない。ただし『年表』が、この時の『民報』の「主筆」を章太炎、「管理」を張継としているのは、明らかに事実と合致しない。たしかに張継は創刊号以来『民報』の「編集」(「管理」ではない)を担当している。「経理」は、当初が陳天華、その自殺(12月8日)後は谷思慎である。しかして章炳麟(太炎)の方は、1906年夏になってからようやく日本に亡命し、『民報』の6号(1907. 1. 10付)以降の

49) チャウの孫文との面談についての基本的な資料は『年表』[HXH 所蔵本; NB 1957: 67; TP 1956: 66]である。なお、その面談の時期については、チャウの宮崎滔天宛書簡[『宮崎滔天全集』第5巻691]では、明治46年(1907年)11月となっているが、これは事実と合致しない。この時期の孫文の日本滞在は、1905年7月19日から9月8日までである[『國父年譜』1964: 175-182]からである。チャウと孫文の話合いが物別れとなった事情に関しては、白石[1981a: 88-89]参照。

50) 「岩」の代りに「巖」の字をあてることもある。両方ともベトナム発音で同音。彼はハノ

ドンキンギアトック
イ東京義塾(1907年開校)の校長の息子で、本名はルオン・ゴク・クエン (Lương Ngọc Quyền)。1905年弟とともに来日。1915年にベトナム国内でフランス当局に捕われて終身刑の宣告を受けたが、1917年タイグエン監獄の蜂起を指導して失敗、自殺した。

主編となっている。この時同時に、薫修武が経理についている〔張玉法 1975：385-386〕。つまりニャムの「寄食」時代には、張継がいたのは事実としても、章炳麟はまだ来日していなかったのである。しかし、いずれにせよ、ニャムたちを通じて、在日ベトナム人と張継たちの交流が、1905年末から始まったことは事実であると思われる。このようにして、在日ベトナム人は、孫文よりも、むしろ張継（や章炳麟）たちと、かなり早い時期から親密な接触を持っていたと考えることができる。彼らが、章や張を中核として組織された「亜洲和親会」（「東亜同盟会」）に参加してゆく契機のひとつも、この点に求められるであろう。

以上にみてきたごとく、日・中の革命家を中心として、在日のアジア諸国の活動家の交流は、1907年中半ごろまでには活発化した。「亜洲和親会」はこのような交流の頂点に開花したとみなすべきであろう。1907年後半期をこのような交流の高潮期とすれば、1908年は、その退潮期にあたる。上述のごとく、日本人社会主義者の主宰する「社会主義金曜講演」は、1908年1月17日の「屋上演説事件」をもって最初の本格的な官憲の弾圧を受けた。そしてその余波で、在日の中国人の中心人物たる張継も、離日を余儀なくされている（本稿 346-347 ページ）。ただし、官憲による「金曜講演」に対する監視は、これより以前から始まっていた。幸徳秋水の「東京評論第三信」〔『大阪平民新聞』 9号（1907. 10. 5付）〕には、講演の聴衆中に「二三の支那人ありしより日本政府は大に狼狽し、日清両国の革命党が提携運動を初めしにはあらずやとて四方に探偵を放ちて取調べ居候」と記されている。また、16回の講演（1907年12月20日）には、臨監警部が立ち入り、中止解散を命じた。そうして、次の第17回（12月27日）の会合をもって、従来（10月4日の第5回以

降毎回）会場を提供してきた三崎町の吉田屋は、以降の使用を断わっている。当局からの圧力があったからである。⁵¹⁾

「屋上演説事件」以降も、「金曜講演」は継続されていたが、ついに1908年3月13日の会合で中止解散を命ぜられた。以降活動は停止したようである〔『日本平民新聞』 20号（1908. 3. 20付）：15面；21号（1908. 4. 5付）：14面〕。さらには彼らの『日本平民新聞』も、1908年5月20日の号外をもって「臨時休刊」を余儀なくされている〔同上新聞号外（1908. 5. 20付）：1面〕。そうして上述のごとく、7月には「赤旗事件」がおこって（本稿 347 ページ）、土佐中村に帰省中の幸徳秋水を除いて、「直接行動派」の主要メンバーが獄中の人となったのである。

他方、在日の中国人も、1908年初めに張継が日本を立ち去ったのに引き続き、4月ごろからは章炳麟と劉師培の関係が悪化している。⁵²⁾ 劉は、『天義』の停刊後、4月には『衡報』を創刊したが、それも9月28日には発行禁止とされ、1908年陰暦の冬には日本を離れて上海に帰った〔永井 1974：15以下；小野川 1975：364〕。他方、章炳麟は、1908年10月19日以降「民報封禁事件」の被告となって、言論活動の場を失っている〔永井 1972〕。この事件は、清国政府の圧力を受けた日本当局の干渉によるものであり、その累

51) 『日本平民新聞』〔16号（1908. 1. 20付）〕の鈴木犀「東京だより」に、16, 17回の集会について述べられている。なお、18回（1908年1月3日）は新年余興のため従来の会場を用いた〔同所；同上新聞 16号（1908. 1. 20付）：「消息欄」〕。次の回より、会場は本郷平民書房楼上に移されている。事実、「屋上演説事件」のおきた1月17日の集会は、平民書房で開催されていた。

52) 従来、無政府主義に傾斜していた章炳麟は、これと並行して、無政府主義への反対の姿勢を明確にしている〔小野川 1975：363；武仲 1974：15〕。

は『民報』のみではなく、雑誌『雲南』などにも及んでいることが同誌15号（1908. 11. 10付）の「社告」の内容で判明する[『雲南雑誌選輯』 1958：854]。⁵³⁾

このようにみてくると、日・中の活動家を中心として組織された「亜洲和親会」も、1907年の順調な活動ののち、1908年前半までには退潮期を迎え、活動を停止していったと考えるのが妥当であると思われる。

III 在日ベトナム人と「東亜同盟会」ないしは「亜洲和親会」

以上2節にわたって、ファン・ボイ・チャウのいう「東亜同盟会」と竹内善作のいう「亜洲和親会」とが、同一組織にほかならず、その活動期間は、1907年秋ごろから1908年初めごろにかけてであったと考えるのが妥当であることを検討してきた。そこで、本節においては、チャウたち、在日ベトナム人と「東亜同盟会」ないしは「亜洲和親会」（以下「会」と総称する）との関わり方について、いま少しく検討を加えることとしたい。

すでに本稿において検討したように、チャウたちの「会」への参加の契機を、従来のベトナム史研究における定説のごとく、日本当局による弾圧→日本への失望、という脈絡の中で理解することは妥当でない。事實は、日本当局による弾圧事件の発生する以前に、彼らの「会」への参加があったのである。し

たがって、彼らの「会」への参加については、ほかの要因を検討しなければならない。この点を考察するためには、まず「会」の性格について、いま一度検討を加えておく必要がある。

第1に指摘すべき点は、「会」が明白に反帝国主義を旗印に掲げていることである。「亜洲和親会約章」の「宗旨」の項には、「帝国主義に反抗するに在り。亜洲の已に主権を失せる民族をして、各独立を得しむるを期す」とある[竹内 1948：77]。

さらに第2に指摘すべき点は、この「会」の中心的メンバーが、日本を他の欧米列強と同列に論じ、アジアの共通の敵として明確に位置づけていることである。劉師培は「亞洲現勢論」において、「最近のアジア情勢について考えるに、弱種（弱小民族）の滅亡はいずれも深くあわれむべきであるが、ただ日本政府だけはアジアの公敵（共通の敵）である」と喝破する。彼はそれに続けて、「現在白人諸国はアジア属領の反乱を恐れている。また日本がかれらの属領を併呑することを恐れている。そこで日本の軍事力を利用して、自国のアジア属領を制圧しようと謀った」と指摘する。欧米列強が、日本をしてアジアの憲兵たらしめようとしているというのである。劉はこの文脈の中で、諸列強と日本との間の条約の意義を検討する。日仏協約は、「フランス人が日本と連合して、ベトナム（原文は安南）の死命を制しようとするものだ。さらにまた日仏、日露の二つの協約は、フランス・ロシアが日本と連合して中国を分割する前ぶれである」。そうして劉は次のごとく結論する。「つまり日本はアジアにおいて、朝鮮の敵であるだけではない。同時にインド、ベトナム（安南）、中国、フィリピンの共通の敵である」。「だからアジアの平和を守り、アジア諸弱種の独立を謀るには、白人の強権はもとより排除すべきだが、同時に日

53) 実際、従来1~2カ月間隔で発行されていた同誌は、14号（1908. 6. 30付）以来15号の発刊までに、5カ月を要しているのである。なお、この時期の在日中国革命派の諸機関紙・誌の発刊状況の悪化に関しては、日本政府による弾圧のみに要因を求めるわけにはゆかないとの指摘もある[小野 1978：63-64]が、そうではあったとしても、日本政府の弾圧が大きな影響を及ぼしたこと自体は否定できまい。

本が強権を以てわがアジア人を侮ることをも排除しなければならない」[小島 1978：88-89]。

また章炳麟は、1907年4月20日のインド人の集会における大隈重信の演説を鋭く批判する。⁵⁴⁾ この時大隈は、「英皇撫印度至仁博愛、不可此擬、而勸印度人之改良社會、勿怨他人勿謀暴動」と説いたという。つまり、イギリスのインド統治の恩恵を強調し、暴動を深く戒めたのである。この発言に対して章炳麟は、それが、同席していた「英人士女」に対する大隈のおもねりにほかならないと指摘する。そうして「東方の英傑」たるべき「大隈伯」がこのような発言をしたのは、日英同盟のゆえに「印度人をして手を藉す所を得しむるを欲せざる故なり」と結論づけている[『民報』13号(1907. 5. 5付)：「記印度西婆耆王記念會事」]。ここにも、日英同盟のゆえに、日本の政治家がイギリスの側に立ち、インド人と敵対する立場にあるとの発想がみえる。

これに対するインド人自身の見解はどうか。同じく章炳麟は、「印度人之觀日本」[同上誌20号(1908. 4. 25付)]の中で、「印度人帶氏」の発言を紹介している。「帶氏」は、前述のごとくチャウの『年表』によって「東亜同盟会」の参加者とされている人物である。章炳麟によれば、「帶氏」は次のように語ったとされる。「日露戦争以来、日本人の傲慢は甚しくなった。東方の大国はすなわち我等なりと思っている。足なし(大隈のこと)はもとより中国を蔑視しているのだが、(中略)彼は中国の学生と結んで、その勢力を中国本土に拡げようとしているのである」。「インドは日本との関係がうすいが、日英同盟が最も恐れているのは、インドの光復である」。「日本

がまだ盛んにならない頃、アジアの諸国には常に小さな争いはあったが、なお平和というべきだった。しかし今やそうではない。(中略)白人を引き入れ同類を侮どった者は誰であったか」[伊東他 1974：82-84]。⁵⁵⁾ ここにも、日露戦争以降の日本人の「大国」意識の増長、中国への侵略の意図、そうして日英同盟に基づくインドの独立運動への敵対を鋭く批判する視点がある。

次に、日本の社会主義者についてみる。彼らは、『大阪平民新聞』[1号(1907. 6. 1付)]に「協商の意義」なる一文を掲げている。その中で彼らは、「日仏協商將に成らんとし」、「又日露、日米の協商は良好に進捗しつつありと伝ふ」とまず指摘し、各条約の意義を手短かに説明する。⁵⁶⁾ そうして、「奇なる哉、支那保全門戸開放を目的とすと称して未曾有の大戦を敢てしたる日本政府は今や列強と協議して事実的に支那の利源を分割しつつあり、然らば所謂『平和の確保』とは強国が聯合して弱国の市場を分有する事なるか」と批判を加える。⁵⁷⁾

「会」の組織された1907年は、日露戦争後の日本の対アジア政策が闡明化された年にあたっている。6月10日には日仏協約の締結、7月3日ごろには韓国のハグ密使事件と、

55) このインド人の日本観は、章自身の日本認識にはかならないとの指摘もある[河田 1978：131注36]。しかし、筆者はむしろ、章とインド人との間に共有されていた認識とみなしたい。

56) 日仏協約締結の目的については、次のごとくいう。「戦勝の余威を以て日本が東洋に於ける仏国の利益圏を侵害することなきかは近時彼の国資本金家の憂慮する所なりしが、日本は毫も政治的野心を有せざることを明かにし安南方面に於ける仏人の利益獲取を承認し、其代りとして日仏通商条約を東洋の仏領地に適用せんとする」。

57) 幸徳秋水の東方・極東問題に関する認識については、岡崎[1950]、山口[1973]などを参照されたい。

54) これについては大杉孝平[1978：65-66]を併照されたい。

それに起因する7月19日の韓国皇帝退位事件、そして7月24日の第3次日韓協約、7月30日には日露協約の締結があった。日本の対朝鮮・中国政策が明示されたとともに、諸列強も日本の存在を無視し得なくなり、ここに露、仏、さらにはイギリスと日本の間に協調関係を作りつつ、東アジアの勢力圏を画定せんとすることが明白となったのである。このような背景があって、上述の劉師培や章炳麟、そしてインド人「帯氏」や日本の社会主義者たちの日本に対する批判が生れたのである。そうしてまた、日本をアジアの共通の敵とみなす視点、さらには日本を含めた諸列強のアジアにおける協調関係確立に対する状況認識が、彼らをして「弱種」間の連携の必要性を痛感せしめ、「亜洲和親会」の組織化を促す一因ともなったと考えられる。⁵⁸⁾

このような状況を前にして、チャウたちが在日ベトナム人も、無関心でいられたとは思われない。中国人やインド人によって批判された大隈重信は、チャウが来日当初、頼ろうとした日本人政治家のひとりであった。日仏協約は、チャウたちの祖国の運命に直接関わる取決めである。彼らも、このような情勢を前にして、また日本人や中国人、インド人との交流を通じて、同様の対日認識、東アジアの政治環境に対する危機感を抱いたであろうと思われる。⁵⁹⁾ そもそも1905年の日露戦争期に、日本からの援助を得ることを目的として、ベトナムを密出国したチャウは、それから2年ほど経った1907年には、日本に対する不信と

批判を深めていったとみてよいであろう。⁶⁰⁾ 日仏協約締結以前のものではあるけれども、1907年3月31日付で発行された雑誌『雲南』5号の「讀日本併呑中國策之序文記」の中で、チャウが日本の「併呑中国之策」を示した著書の序文を読んで衝撃を受けたとされていること〔白石 1981b : 266-267〕は極めて興味深い。

渡日当初の時期、チャウは大隈重信や犬養毅、柏原文太郎などといった政客に多くを期待していた。彼らは、いわば日本の政策に連なる人々である。彼らの「アジア主義」の心情や、アジア諸国からの亡命政客に対する「義侠」⁶¹⁾ 心も、日本の大陸進出や将来の南方進出の野心と切り離し得るものではなかった〔後藤 1979 : 66 ; Jansen 1970 : 4 ; 白石 近刊 ; 山口 1963 : 113〕。⁶²⁾ 無論チャウは、1907年以降も離日の時期まで、犬養や柏原から多くの援助を仰いでいる。また彼らの恩情に対して、チャウが感謝の気持を持っていなかったとはいえない。しかし彼は他方

60) ちなみに章炳麟にも同様の変化が指摘できる。すなわち、1897年段階では、「中依東、東依中」(東とは日本)と主張していた。しかも、その文章のタイトルは「論亞洲宜自爲唇齒」であった。しかるに彼は、1907年には、日本に対する「倚依」の幻想を捨て、日本の「助英侵印」の政策や、朝鮮、遼東半島に対する圧迫に反対するようになった、と丁則良氏〔1957 : 31〕は論じている。なお河田〔1978 : 115 以下〕をも併照。

61) 1905年の大隈重信のチャウに対する発言中に、「俠義」なる語が用いられていた〔白石 1981b : 236-237〕。なお後藤〔1979 : 66〕をも参照されたい。

62) 柏原文太郎が1909年4月29日に、日本官憲当局に対して行なった陳述〔外務省外交史料館文書 b〕(長岡〔1966 : 260-261〕に引用)は、この点で興味深い。柏原は、ベトナム人の日本への反撥を、米国に乗ずる機会を与えるものとして危惧している。つまり、アジアにおける日・米の勢力関係の中で、在日ベトナム人問題を捉えている。

58) 章炳麟の全体的な思想的枠組の中で「被圧迫民族の連帯の視点」を位置づけたものとして近藤〔1962〕、河田〔1978〕、劉師培については丸山〔1972〕、森〔1978〕などを参照されたい。

59) 同様の推論を、別稿においては、チャウと雲南省留日活動家たちとの交流を検討する中で試みた〔白石 1981a〕。

で、日本人の宮崎滔天（本稿 339 ページ、および注 10）や浅羽佐喜太郎〔白石 1981b：284〕の口を藉りる形で、日本の政治家や大隈、犬養に対する不信感を表明してもいるのである。⁶³⁾

さらに、「会」に結集していた日本人や中国人、インド人には、中国、朝鮮に対する日本の侵略政策や仏領インドシナ、英領インドをめぐっての日本の対列強外交についての、根本的な批判の視点がある。また日本を、他の欧米植民地主義列強と同列の存在として位置づける視点がある。この点は、犬養たちが（たとえ口先だけにせよ）アジア主義的な議論の枠組の中で、日本をア priori に他のアジア諸国と結びつけているのとは、極めて対照的である。つまり日本は、地理的にはアジア州に属し、人種的には「黄種」のひとつではあるけれども、そのことがただちにアジア諸民族の仲間であり味方であることを意味するわけではない、との視点がある。逆に、日本をアジアの「公敵」とみなすのである。

この問題に関連して、チャウにおける「同病」の諸民族との「連絡」という認識についても言及しておく。「同病」という言葉が持ち得る概念の内容に関しては、別稿においてすでに論じたところであるので〔白石 1981a：60 以下〕、ここでは取りあげない。ただ、ここでいま注目しておくべきことは、「東亜同盟会」への参加を、チャウが「専傾向於中華革命、及世界各民族之與我同病者」（本稿 339 ページ、および注 9。傍点引用者）といった自覚と結びつけて回想していることである。ひるがえって鑑みるに、渡日当初のチャウは、ベトナムと外国との連携を考える際に、まず第 1 に、専ら外国からの援助獲得といった局面で議論を立てる傾向があっ

た。また第 2 に、当時彼が連携の相手として常に念頭においていたのは、日本や中国といった「同文」の東アジア漢字文化圏の国々に限定される傾向があった〔白石 1981b：247；白石 近刊〕。しかるに 1907 年になって、日本への失望、批判を転回軸として、アジアの「亡国」諸民族との連携を志向する段階になると、彼の視点は、まず第 1 に、相手国からの援助獲得から、「同病」の民族同士の「互相提挈」へと変ってゆくのである。また第 2 に、彼の視点は、「同文」の漢字文化圏という境界を越えて、他のアジア諸民族（さらには世界の「同病」の諸民族）へと拡大されてゆくのである。つまり「同文」たること、文化的共有性そのものが、「提挈」のための基礎となるのではなくして、むしろ国際政治環境の中に現実に規定された状況の如何が、決定的な要因となるのである。⁶⁴⁾ここに「同文」から「同病」への認識の転換の契機があったと思われる。また、マルティ・ナショナルなレベルでの諸民族の提携を目指すことともなったのである。

なお「同病」という用語は、「会」に関わった中国人の間でも再三用いられている。むしろチャウが中国人たちの用語を借用したとみるべきであろう。例えば章炳麟は「五無論」〔『民報』16号（1907. 9. 25 付）〕の中で、「印度，緬甸滅於英，越南滅於法。……孰有聖哲舊邦而忍其使遺民陷台隸？」と指摘し、「則當推我赤心，救彼同病」と論ずる〔武仲 1979：49-50；丁 1957：32〕。また『民報』23号（1908. 8. 10 付）には、撓鄭の署名で

64) この点は、例えば 1899 年の孫文たちのフィリピン援助が、「現実には、まだ帝国主義国として自立していない日本との提携に期待し、日本のアジア主義者を媒介とした、日本の軍部・膨張主義者の『援助』を利用して行なわれた」〔久保田 1978：237〕事実と比較すれば、「会」結成の持つ画期的な意義も明らかとなるであろう。

63) なお浅羽については、柴田〔1979〕、後藤〔1980〕を参照されたい。

「亞洲和親之希望」という文章が掲載されている。この文章は、その発表時期が少々遅い点が気になるものの、そのタイトルよりして、「亜洲和親会」との関連を強く示唆するものがある。さてその中で著者はまず、インド、ベトナム（安南）が漢族とともに「亞洲兄弟國」であることを強調する。そうしてインド、ベトナムがそれぞれイギリス、フランスの属領となっていることは、自分たちが満州に征服されていることと異なるところがないと論じ、そのあとに続けて、これらの国の間に「同病相憐之念」の存在することを指摘する。そうして「日本を除く亞洲諸友邦は、誰がわれわれと同感しないものがあるのか」と述べている。ここには、漢族がインド、ベトナムと「同病」の境涯にあり、それゆえ「同感」し合える関係にあるとの認識が読みとれる。しかも日本は、「亞洲諸友邦」からはっきりと除外されているのである。さらに注目すべきことは、この文章がそれに続けて次のように論じていることである。すなわち「觀印度安南二國人誠懇有志，非輕佻寡信者，比亞洲而和親也，其大有造於將來哉。余引領望之矣」[『民報』23号(1908. 8. 10付)]と述べ、インド、ベトナムに（民族解放の）「志」ある人間の存在することを、それら諸国人との「和親」に期待のおけることの論拠としている。⁶⁵⁾

次に、チャウが「強權」と「公理」を対置する概念として用いていることに言及しておきたい。このふたつの言葉が『年表』において用いられているのは、「東亜同盟会」と「滇桂越連盟会」⁶⁶⁾が解散された事件に対して、

チャウが感想を述べている箇所においてである。すなわち『年表』によれば、「東亜同盟会」にはイギリス、フランス（の植民地）の革命党が加わっており、これを英・仏政府が懸念し、また日本政府も朝鮮革命党や日本社会党の参加を心配した。かくして、ついに会は日本の警官によって解散を厳令された（本稿341ページ）。他方「滇桂越連盟会」は、満清政府とフランスが日本政府に対して「交詰」したので、やはり解散させられた。こういった事件を記したのち、チャウは次のような感想を述べる。「吾人須知處於強權世界，幾無正義公理之會，而能堂皇標揭者也」（傍点引用者）[HXXH所蔵本；NB 1957：120；TP 1956：124]。また、「公理」を「強權」と対置する用法は、チャウの後年の回想録のみではなく、1909年に小村寿太郎外相にあてた書簡の中でも用いられている[白石 1981b：282-283, 293]。なお、『年表』においては、ほかに「強權」を「人道」と対置する用例がみられる。それは宮崎滔天の言葉を紹介している箇所である（本稿339ページおよび注10）。

ところで、このような「強權」と「公理」を対置する用例は、実は中国人の著作においても、1907年までには一般化している。劉師培たちの雑誌『天義』[3冊(1907. 7. 10付)]の「政府者萬惡之源也」には、「文明政府者，外託偽道德之名，内視公理若芻狗，對於弱者則爲自利之政府，對於强者則爲勢利之政府，横行強權賤視弱種」（傍点引用者）とある。劉師培の「亞洲現勢論」[11・12合冊(1907. 11.30付)]においても、「今日之世界強權横行之世界也，而亞洲之地爲白種強權所加之地」。「日本大隈伯之語印人也亦以服从英人相勉。逞強權以昧公理莫此惟甚」となっている（傍点引用者）。無政府主義者のみではなく、在日雲南省人（『雲南』1906. 11.30付）にも同様の事例のあることは、旧

65) この点は、ベトナム・雲南連携論においても重要な要素であったと、旧稿において指摘した[白石 1981a：66以下]。なお武仲弘明氏[1979：49]は、「志」を「異民族に抵抗する精神」と解する。

66) この組織については白石[1981a：53以下]を参照されたい。

稿において指摘した〔白石 1981a：101 注 104〕。念のために再び引用すれば、「夫自鐵血主義，帝國主義發生以來，世界已惟有強權而無公理」（傍点引用者）〔『雲南杂志選輯』1958：289〕。また先ほど引用した撓鄭の「亞洲和親之希望」〔民報 23号(1908. 8.10 付)〕にも「公理泯滅，強權恣肆」（傍点引用者）とある。ここでいう「強權」とは、日本を含めた帝国主義諸列強の支配，弾圧を指し、「強權世界」とは，そのような「強權」の「横行」する現実の世界を指す。そうしてこのような「強權世界」においては「公理」はないがしろにされていると，彼らはみなすのである。そうしてさらには，「公理」に基づく，被抑圧民族の反「強權」＝反帝国主義を主張するに至るのである。このような認識は，上にみてきたように，「会」の組織された1907年までには，すでに中国人の間に一般化していた。⁶⁷⁾ 恐らくチャウもそのような認識を，当時から受け容れていたと考えるべきであろう。

以上に，1907年当時の東アジアをめぐる国際環境，とりわけ日本の対アジア政策の動向と，それに対する日本，中国，インドの革命家の認識に留意しつつ，チャウにおける対日認識の変化の契機を検討してきた。それによれば，日本を他の帝国主義列強と同列に論じ，「アジアの公敵」とみなす視点が，「会」に結集した各国の活動家の間に共有されていた。そうして，「公理」をないがしろにする「強權」の「横行」する世界にあって，「同病」の諸民族が連携すべき必要性が共通に認識されていたのである。「会」は，このような認

識の共有の上に成り立っていたものと考えるべきであろう。

しかしそのことは，チャウが「会」に参加した日本人や中国人と，全ての面で意見の一致していたことを，必ずしも意味しない。これに関して以下に少しく言及することとした。

まず第1に指摘すべきことは，「会」に参加した中国人や日本人たちの無政府主義の主張に関わる。彼らの著作から，当時彼らが，国家や民族の枠を越え，「種族革命」⁶⁸⁾を超越した地平での，諸民族の連携を期待していたことが明瞭である。例えば幸徳秋水は，「東京評論（四）」〔『大阪平民新聞』10号(1907. 10.20 付)〕の中で，インドの革命運動について，以下のごとく論じている。「彼等革命党中有為の者少なからず，小生は彼等が社会主義，世界主義に来るの日決して遠きに非ずと信じ候，彼等は万国の革命党と聯合提携するに非ざれば，其目的を達すること難し，是れ印度革命家中，具眼の士の夙に看破したる所に候」（傍点引用者）。また「病間放言」〔『高知新聞』1908. 1.1 付)〕の中では，フィリピン，ベトナム（安南），朝鮮の革命家に言及して，「彼等の運動が単に一国の独立，一民族の団結以上に出でざるの間は，其勢力や甚だ見るに足るなしといへども，若し東洋諸国の革命党にして，其眼中国家の別なく，人種の別なく，直ちに世界主義，社会主義の旗幟の下に大聯合を形成するに至らん乎，二十世紀の東洋は実に革命の天地たらん」と論じている（傍点引用者）〔『幸徳秋水全集』第6巻384〕。また「大久保村より」〔『日刊平民新聞』1907. 4.4 付)〕の中でも，「社会党の運動は万国運動である。人種や国境の区

67) 清末民国初期における中国人の「公理」意識の系統立てた分析として，武仲〔1974〕がある。特に「公理」（理想的道理）と「強權」（帝国主義）を対立概念として劉師培ら無政府主義者が措定し，それが後代の孫文や李大釗に継承されていった点に関しては，同上論文〔14 以下〕を参照されたい。

68) 何震，劉師培の共同論文「論種族革命與無政府革命之得失」〔『天義』6冊(1907. 9.1 付)〕に典型的に示されるごとく，彼らは「種族革命」を「無政府革命」に對置していた。

別はない。(中略) 欧州全体の社会党は殆ど一体となつて働いている如く、東洋各国の社会党もまた一体となり、進んで世界に推及ぼさねばならぬ」(岡崎 [1947: 35] よりの再引用) と記しているのである。

同様に章炳麟や張継たちが、彼らの主宰する「社会主義講習会」で、中国革命が排満興漢の「種族革命」にとどまることの非を再三説いていたことは、同講習会の模様を報じた『天義』各号の記事でも確認される[『天義』6冊(1907. 9. 1付):「社会主義講習会第一次開會記事」; 8・9・10合冊(1907. 10. 30付):「社会主義講習会第二次開會記略」, 「社会主義第三次開會記」, 「社会主義講習会第四次開會記略」]。⁶⁹⁾ また劉師培は「亞洲現勢論」の中で、「アジアの被圧迫民族」が「同時に独立すること」とともに、「政府を設けないこと」を主張している。そこには、もしも革命が成功したとしても、政府を設けるならば、「それは暴を以て暴に易えるもの」にすぎないとの発想がある。⁷⁰⁾ また国家の別を取り払わずに「各国が並び立てば、必ず国際問題が生じ、紛争の戦禍を招くこと」になるとの発想もある。そうして「強権を排斥する目的を達成し、同時に共產無政府の目的をも達成することを願う」と主張するのである[小島 1978: 107-108]。

日・中の無政府主義者のアジア諸民族連携論が、「種族革命」を超えた「大聯合」と「無

政府革命」を展望したものであったことは明らかである。そうして、彼らの展望を支えていたのは、「無政府革命」の実現可能性に対する楽観的な見通しであった。⁷¹⁾ 彼らが「亜細和親会」を、そのような彼らの主張を宣伝し、実践する場として位置づけていたことは想像に難くない。上に引用した劉師培の「亞洲現勢論」や幸徳秋水の「病間放言」などが、「会」を強く意識して執筆されたものであることは、それを裏づけている。また「亜細和親会約章」の「義務」の項には、「一、亜細諸国、或は外人侵食の魚肉と為り、或は異民族支配の傭奴と為る。其の陵夷悲愴己に甚し。故に本会の義務、当に相互扶助を以て各独立自由を得しむるを以て旨と為す」、「二、亜細諸国、若し一国に革命の事有らば、余国の同会者は応に相互協助すべし。直接間接を論ぜず、総て功能の及ぶ所を以て限と為す」(傍点引用者)[竹内 1948: 77] とある。ここに「相互扶助」(「相互協助」)という言葉の用いられていることに注目する必要がある。この言葉は、いうまでもなくクロボトキンの『相互扶助論』⁷²⁾ よりとられたものであり、当時の日・中の無政府主義者のキー・ワードのひとつとなっている。⁷³⁾

71) 例えば、第3次の「社会主義講習会」の席上での張継の発言[『天義』8・9・10合冊(1907. 10. 30付):「社会主義第三次開會記」, 幸徳秋水のインドにおける「無政府」実現の見通し[『日本平民新聞』16号(1908. 1. 20付):「南海評論」]などに良く示されている。さらにその背景としては、当時の欧米諸国にあって、ロシアなどを先頭として、無政府主義運動が極めて隆盛であった事実も看過できない。

72) 大杉栄訳[クロボトキン 1917]がある。また大杉[1924]をも参照されたい。なお、当時の日本の無政府主義者、特に幸徳、大杉にはクロボトキン主義の影響が強いといわれる[大沢 1967: 205-230]。

73) この言葉の用いられた典型的な例としては、「社会主義講習会」第1回会合で、幸徳秋水

69) また章太炎「國家論」[『民報』17号(1907. 10. 25付)]をも併照されたい。

70) 「以暴易暴」という用語例は、劉師培、張継の発起人名で発表された「社会主義講習所広告」[『天義』3冊(1907. 7. 10付)]や何震、劉師培合撰「論種族革命與無政府革命之得失」[同上誌6冊(1907. 9. 1付)]にもみられる。これが、劉たちの一種のキー・タームとなっていたことがわかる。なお、その出典は「左伝」に求められる[森 1978: 167]。

しかし、このことは、「会」に参加した他の活動家たちが、ことごとく無政府主義に賛同していたことを必ずしも意味しない。「会」の設立の中心となった日・中の活動家たちが、「無政府革命」の展望を持ち、その展望のもとに「会」を組織したことは事実である。また「会」の「約章」を執筆した章炳麟が、無政府主義への思い入れを込めて、「相互扶助」なる言葉を「約章」の文中に挿入したことも事実である。だが、同じ「約章」の「宗旨」の項には、「帝国主義に反抗するに在り。亜洲の已に主権を失せる民族をして、各独立を得しむるを期す」とあって[同所]、結局各民族の独立達成のみを目標に掲げ、無政府主義を謳っていない。さらに、次の「会員」の項には、「凡そ亜洲人にして、侵略主義を主張する者を除き、民族主義、共和主義、社会主義、無政府主義を論ずること無く、皆入会することを得」と規定されており[同所]、同会が反帝国主義を唯一の入会資格としていたことが明示されている。しかも「会」の当面の活動は、「須らく毎月聚会一次たるべし」とあるほかは、「不時通信し、相互に愛睦」することであったり、新入会員の勧誘や

会員名簿の所持であったりするのみである。つまり連絡、親睦の域を出ない。会費も「能く紙筆、郵費を支するを以て限りと為す」ほどの「若干を収集」するのみである。つまり「会」の拘束力も制限されたものであった。それは、将来の「一国に革命の事」があった折の会員の「相互協助」が、「直接間接を論ぜず、総て功能の及ぶ所を以て限と為す」と定められていたことから明白である[同上：77-78]。つまり、この「会」は、日本・中国の無政府主義者のイニシアティブのもとに組織されたものの、それは反帝国主義を共通の基盤とした、在日のアジア活動家の集まりであって、相互連絡、親睦を当面の主要活動とする、極めてゆるやかな組織であったと考えられる。

このことは、「会」の参加資格を無政府主義者に限定することなく、より広く門戸を開放せねばならぬ事情があったことを推測させるものである。つまり、日・中の無政府主義者が「会」への参加を期待した、他の国の在日活動家たちの多くが、無政府主義の主張に必ずしも賛同してはいなかったという事情である。それゆえに日・中の無政府主義者たちは、アジア諸国の活動家たちを、反帝国主義の旗幟のもとに糾合することのみ当面の目標をおいたのであろう（そうして恐らくは、「会」に糾合した活動家たちを徐々に無政府主義へと改宗させてゆくことを期待していたのであろう）。

このような推測は、少なくともファン・ボーイ・チャウの場合にはあてはまると思われる。まず、彼が「東亜同盟会」に参加した契機として、『年表』の中で語っている経緯についてみてみよう。それによれば、チャウは以前に宮崎滔天と会見したことがあった。チャウによれば、宮崎は「富有全世界革命之思想」であったという。たしかに宮崎には、被圧迫民族たる「亜細亜」、とりわけ中国に

が中国人聴衆を前にして行なった演説[狭間1975：76]、同じく劉師培の第1回「講習会」における発言（『天義』6冊（1907. 9. 1付）：「社会主義講習會第一次開會記事」，邦訳西[1977：438-439]），石川三四郎の巢鴨監獄からの堺利彦宛の書簡（1907. 7. 7付）[『石川三四郎書簡集』1957：13-14]，同じく石川三四郎の回想記[『石川三四郎著作集』第8巻200-201]など。クロボトキンの『相互扶助論』の第1章は、山川均によって1907年秋に、堺利彦編の『平民科学』叢書（全6冊）のひとつとして、『動物界の道德』という題で翻訳、出版された[山川1961：286]。大杉栄と進化論，相互扶助論の関連については、森戸[1928：386以下]。なお有田[1965：10]，山泉[1975：64-69]，森[1978：182注40]，白石[1981b：288-289]をも参照されたい。

における革命を中心的推進力として「世界革命」へと向かう発想があった。そこには無政府主義的な色彩すらみられるのである。⁷⁴⁾ しかし『年表』における記述を読むと、チャウが後日になって深く納得するようになったのは、宮崎滔天のそのような「全世界革命之思想」そのものではない。チャウが納得したのは、「聯絡世界之思想」にほかならないのである。たしかに『年表』の中で、チャウは「全亜諸亡国之志士」との「提携」に際しては、「各民族をしてともに革命の舞台に^{のぼ}らしめることを謀る」と述べている。しかし、それも各国の民族運動に対する相互協力を意味するのであって、「全世界革命」→「無政府制」の実現を予期したものであったとは思われない。別稿においても論じたごとく〔白石 1981a: 86以下; 1981b: 291〕、チャウは強烈な国家意識の持主であって、ネーション・ステートの樹立を目指しての独立革命を超越してしまうような、日・中の革命家たちの無政府主義の主張には、とうてい賛同したとは思われないのである。

次に、日・中の無政府主義者とチャウを比較してみて気づく第2の相違点は、「強国の諸民党」との「連携」に関してである。無政府主義者は、「強国の諸民党」と「アジアの弱種」の独立運動との「連携」の必要性を強く主張する。劉師培は、「アジアの弱種が独立しなければ強族の政府を顛覆することはできない」、「アジアの弱種は強国の諸民党と連携しなければ独立を実現できない」と論ずる。さらに具体的に、(弱種は)「独立の際、政府を持つという見解があったのでは、強国の民党の助力を得られない」、「アジアの被圧迫民族がもし独立を実現するなら、強国政府も必ずやしだいに消滅するだろう。さすればど

うして外患を恐れることがあろう」と論じ、「強国」と「アジアの弱種」の間の革命的因果関係を強調する。劉におけるこのような議論が、彼の無政府主義の主張の上に立脚するものであることは、一見して明瞭である。

このような議論の背景としては、幸徳秋水たち日本人社会主義者の次のような主張をも勘案しておく必要がある。すなわち、各国の政府の圧政の下にある人民は、植民地本国であろうが、被植民地国であろうが、圧迫されていることには変りがないとの主張である。そうして、そこに本国と被植民地国を横断する「平民階級」の連携が可能であるし、また必要であると主張するのである。例えば『大阪平民新聞』[5号(1907. 8. 1付)]の「韓国の末路」には、「日本の強を以て韓国の弱に対す、何事か為し得ざらんや、之が独立を保障すと云ひ、之を保護すと云ひ、之を併吞すと云ふも固より吾人平民階級の関知する所に非ず、唯其受くる所のものは韓国の平民階級と同じく『生活難』のみ、『圧抑』のみ」と指摘する(傍点引用者)。同号「社会主義者の決議」においては、「吾人は朝鮮人民の自由、独立、自治の権利を尊重し之に対する帝国主義政策は万国平民階級共通の利益に反対するものと認む」と述べている(傍点引用者)。

これに対してチャウの場合には、「強国」における革命運動とアジアの「同病」の諸民族の独立運動とを、積極的に関連づけていた形跡はみられない。⁷⁵⁾ その理由は、第1に、チャウが無政府主義の主張に賛同していなかった点に求め得るのかもしれない。上にみ

74) これについては寺広[1954]、大野[1962]、野村[1972]、松沢[1973; 1979]、三木[1974; 1976]などを参照されたい。

75) チャウの『年表』における「東亜同盟会」の位置づけが、「全亜諸亡國志士」との「互相提携」におかれ(本稿注11)、日本の社会主義者との連携の意義については、特に記されていないことを想起されたい。

てきたように、日・中の革命家の「強国」の民党と「弱種」の運動との連携論は、無政府主義の主張に立脚するものであった。そのためにチャウに対して、さほど説得力を持っていなかったと考えることも可能である。第2の理由としては、チャウが現実に滞在していた「強国」日本が、ベトナムの直接の支配国、侵略国ではなかったことも念頭においておく必要がある。中国人にとって、日本は自国領土の分割競争に加わっている「強国」のひとつであった。また朝鮮人にとっては、日本はまさに自国を併呑しつつある唯一の「強国」であった。したがって、中国人は日本の革命党と「連携」することに直接的な意義を見出した。他方朝鮮人は、日本が支配者であるがゆえに、たとえ革命党であろうが、日本人との連携を一切拒否することになった⁷⁶⁾のではなかろうか。これに対してチャウの場合には、日本が（たとえ客観的には「アジアの公敵」として認識されてはいたにせよ）、直接の支配者、侵略者ではなかったがゆえに、日本の革命運動との連携を、中国人のように積極的に評価することも、また朝鮮人のようにきっぱりと拒絶することもなかったのではあるまいか。もしもチャウが、日本にではなく、フランスに赴いていたとしたならば、どうであったろうか。彼は果たして、フランスにおける「民党」との連携の可能性を、真剣に考えたであろうか。それとも、あくまでも独立運動をベトナム対フランスの種族間の抗争として捉え、フランス人との協力を一切拒否することとなったのであろうか。チャウは、日本に赴くことによって、この問題に関する即答を明確な形で出す機会を持たずに

終わったのである。⁷⁷⁾

さて「会」をめぐる、チャウが日・中の活動家たちと見解を異にする点があるが、もうひとつある。日・中の活動家たちといっても、この場合は、とりわけ後者、中でも章炳麟である。章炳麟の執筆した「和親会」の「約章」には、「先ず 印度、支那の二国を以て組織し 会と成す」と記されている〔竹内 1948：77〕。彼が中国人とインド人の連携を他に優先して考えていたことが窺われる。この点をもう少し以下にみておきたい。

そもそも章炳麟は、仏教に対する関心が強く、その関係でインドを特別視する傾向があった〔武仲 1979：49-50；丁 1957：26〕。そうしてインドを中国とともに、アジアにおける2大文明国、あるいは「東土の旧邦と謂い、二国大と為す」（「亜細亞和親会約章」）とみなす。かくして「支那印度既獨立 相與爲神聖同盟、而後亞洲殆少事矣」（「支那印度聯合之法」）⁷⁸⁾との発想が生れる。つま

77) この点に関連して興味を惹くのは、チャウが『年表』の中で、宮崎滔天から「世界の人々と大いに結交し、フランス人の罪惡を鳴らし、世界の人々にこれを聞か」せることを勧められた時に、そのためには英、露、独語の学習が必要であるとのみ記されており、仏語が含まれていないことである（本稿339ページ）。宮崎が果たして実際に仏語に言及しなかったのか、あるいはチャウが『年表』に記す時に仏語を故意に除外したのか、いずれかはわからない。しかし、いずれにせよ、このエピソードからは、欧米を「浪遊」する際にチャウの念頭にあったのは、もっぱら英、米、露、独などの諸国であって、フランスは初めから除外されていたらしいことが推測されるのである。つまりチャウは、独立運動をあくまでもベトナム対フランスの種族間の対立と捉え、フランス人の間にベトナム人の運動に対する理解や協力を求めようとする発想が稀薄であったことを物語っていると思われるのである。

78) 注42に紹介せる『民報』20号中の一文である。

76) 「亜細亞和親会」において朝鮮人が日本人との同席を拒んだ事実を、専ら当時の日本人社会主義者の対アジア認識における限界性として把握したもの石母田〔1953〕（竹内好〔1968〕に再録）がある。

り中国、インド2国が独立して「神聖同盟」を結べば、残りのアジアの独立問題も自ずと解決するとみなすのである。この同じテーマは、彼の執筆した「亜洲和親会約章」においても展開されている。すなわち「印度・支那」の2国が「幸に独立を得れば則ち以て亜洲の屏蔽と為すに足る。十数鄰封、是に因り陵暴を受くること無きを得、故に建立先んずる莫し」[竹内 1948: 77]。ここに、ある意味での大国主義をみることも可能である。⁷⁹⁾

他方、日本の社会主義者にも、インドと中国を、アジアにおける革命運動の最も盛んな国とみなす傾向がある。幸徳秋水の「東京評論(四)」⁸⁰⁾には、「印度の革命運動」は「其眼光未だ人種の国家的範圍を超脱する能はずと雖も、而も其熱心、其勢力、支那の排満運動と共に、東洋の二大革命運動にて候」と記されている。

このようにして、中国人、日本人の双方に、まず中国とインドの革命(運動)がアジアの中で最も重要であるとの発想がみられる。そうして実際に、「亜洲和親会」の第1回会合は、中国人、インド人と日本人の三者の出席をもって開催されたのである(本稿341ペー

ジ)。

これに対してチャウは『年表』において、「東亜同盟会」の結成を提唱したのは自分であって、これに章炳麟がまず賛同し、ついで他の中国人、さらには日本の社会主義者や他のアジア諸国の活動家が応じたかのごとくに記している(本稿340ページ)。無論このようなチャウの回想は、事実と合致していないとみるべきである。本稿において検討してきたように、「会」の設立は日・中の無政府主義者たちのイニシアティブのもとになされ、最初の会合は日本人、中国人にインド人を加えた三者で開かれたとみなすべきである。そのことをチャウも恐らくはよく知っていたと思われるのに、なぜ『年表』の中で、以上のごとき記述を行なったのであろうか。この疑問に関して、事件の中心人物を自分自身に擬する傾向は自伝の類にはつきものである、との一般論で速断してしまってよいのであろうか。というのも、チャウは『年表』の他の部分の記述に関しては、極めて謙虚だからである。新たな活動指針などを決定するに際しては、常に他人がまず意見を提示し、これにチャウが賛同したという記述方法をとっている。しかるに、この「東亜同盟会」に関してだけは、自分が首唱者であると単刀直入に断言しているのである。このような事情を勘案すると、「会」の設立に関するチャウの断言には、それ相応の理由があったとみなされなければならない。すなわち、中国、インドをアジアの2大国とみなし、「会」の中核とみなす章炳麟たちの認識に対する、ある種の反撥である。

また、このエピソードは、章たちが民族や国家の枠を取り払った無政府主義の主張を展開しながらも、その一方で中国を(インドとともに)大国とみなすショーヴィニズムから完全には脱却しきれていなかったことを示唆しているようにも思われる。⁸¹⁾

79) 山田[1970: 21]をも併照されたい。章には「清廷于鄰國強則倭諛弱則驕倨。此最可嗤鄙者。近世朝鮮安南緬甸琉球諸國既屬他人」(傍点引用者)との発言もみられる[『民報』20号(1908. 4. 25付):「支那印度聯合之法」]。ここには、拙稿[白石 1981a: 90]に示した雲南省人の「安南・緬甸を人に佔取するに任せた」という発想と、一脈通ずるものが看取される。なお章炳麟には、元来「極端な華夷思想」があったとの指摘もある[近藤 1962: 216]。他方、革命同盟会の広東派のアジア認識との比較において、武仲明氏[1979: 51]は、章炳麟のインド論を積極的に評価している。

80) 1907年10月13日夜10時筆との附記がある。初出は『大阪平民新聞』[10号(1907. 10. 20付)]。『幸徳秋水全集』[第6巻]に再録。

おわりに

ファン・ボイ・チャウの「東亜同盟会」への参加は、従来のベトナム史研究者によって、1907年の日仏協約の締結→フランス政府の日本当局への要求→1908年陰暦九月の日本当局によるベトナム人学生の解散命令→ベトナム人の日本への失望→中国革命や「同病」の諸民族への関心の転換→1908年陰暦十月の「同盟会」の結成、といった脈絡の中で理解されてきた。これは、チャウの『年表』の記述をそのまま踏襲したことによって生じた理解である。しかし、本稿において検討してきたように、「同盟会」は1908年陰暦十月の結成とはみなされない。それは「亜洲和親会」と同一のものであって、その活動期間は1907年秋から1908年初めにかけてであるとみなすべきである。つまりチャウたち、在日のベトナム人の日本への批判、失望と、中国革命党や「同病」の諸民族との連携の志向は、すでに1907年には明確な形をとっていたとみなすべきである。とするならば、こういった志向が、日本政府の弾圧を契機として初めて生じたとする、従来の定説は再検討されなければならないこととなる。⁸²⁾

81) もっともこれは中国人のみに限ったことではなく、無政府主義の本元のクロボトキンやバクーニン（さらには無政府主義者ではないがマルクス）においてすら、「民族的な偏見」から解放されていたわけではないとの指摘もある〔大沢 1967：183-184〕。

82) 無論、日本当局による弾圧（ないしは圧力）が、チャウにとって大きな衝撃となったことは疑いない（本稿348ページ、白石〔1981b：278-284〕を参照）。しかし、本稿で筆者が指摘したかった点は、チャウの日本に対する失望、批判が、日本による東遊運動の弾圧を契機として初めて生じたものではなくして、すでにそのような弾圧の開始される以前から生じていたということにある。

筆者の結論は、チャウたちベトナム人の中国やアジア諸民族との連携の志向は、一方において、日本のアジア政策に極めて批判的となりつつあった日本や中国、インドなどの革命家との接触を通じて生じてきた、また他方においては、1907年を転機として明確さを増した日本の対アジア侵略政策、列強との協調政策に、チャウたち自身がますます気づいていったことによって生じたものと考ええる。⁸³⁾特に、1907年6月の日仏協約の締結が、重要な意味を持っていたことは否定し難いであろう。チャウたちは、日本当局が日仏協約に基づいて、フランス当局の意を帯し、自分たちを弾圧し始める以前から、すでに日本の意図を見抜いていたというべきであろう。

日本の対アジア、対列強政策の明確化してゆくこの時期に、日本・中国の無政府主義者を一種の触媒として、在日のアジア諸国の活動家の間に提携の試みがなされた。それにチャウたちベトナム人も参加したことは、注目に値する。彼らには「強権」に対して「公理」を対置する姿勢、すなわち「帝国主義」に対して「亡国」、「同病」の諸民族の抵抗・革命を対置する視点、が明確な形で存在した。チャウたちにとって、それは「同文」から「同病」への視座の転換をも意味した。アジア主義的な枠組の中で、日本を仲間・味方とみなす視点から、日本をアジア「共通の敵」とみなす視点への転換である。

しかしチャウは、日・中の無政府主義者たちと多くの点で認識を共有しながらも、結局彼らの「無政府革命」の主張には賛同しなかったと思われる。「亜洲和親会」（「東亜同盟会」）は、日・中の革命家たちにとって、その無政府主義の主張を宣伝し実践する場として位置づけられていたことは間違いない。

83) この点に関しては白石〔1981a；1981b〕をも参照されたい。

しかし、その「会」は結局、反帝国主義を唯一の共通の旗印とする、ゆるやかな連絡組織の域を出るものではなかった。また彼らは、民族主義的な独立革命を超越した無政府共産世界を、ひとつの理念として提示することはできたとしても、現実的にそれを構築するに至る具体的なプログラムを持ち合わせていたとは思われない。山泉進氏 [1975: 64] の言葉を借りれば、「亜細亞和親会」における「アジア連邦」の夢は、「具体的な政治目標を設定しない大同団結主義」であって、「とうていリアルな国内、国際政治の場で力を発揮することはできなかったであろう」ということになる。⁸⁴⁾ 「会」は日本当局による日・中活動家たちへの弾圧などによって、1908年初めごろまでには活動を停止したと考えられる。

しかし「会」の活動は消滅したとしても、アジアの「亡国」諸民族連携の試みは、その後もたびたび歴史の舞台に登場し、その灯を絶やさなかったことは強調されねばなるまい。例えば1919年の3.1独立運動後、上海に設立された大韓民国臨時政府には、趙鏞殷(すなわち趙素昂)の名前がみえている(本稿注48)。彼はチャウによって「東亜同盟会」のメンバーとされている人物である。そうして、この朝鮮人の独立運動に対して、中国人の景梅九や呂志伊らが支援の声明を出しているのである[朴殷植 1972: 207-209, 285-295]。景梅九は、趙素昂とともに「東亜同盟会」の会員であった。呂志伊は、1905年以来在日の雲南省活動家の中心人物のひとりであった。雲南省留日活動家とチャウたちベトナム人に深い交流のあったことは、旧稿[白石 1981a]において指摘した。「亜細亞和親会」(「東亜同盟会」)の精神が、10数年の歳月を経ても、中国大陆を舞台として生き続けてい

た証左とはいえないか。

またチャウの場合には、アジア諸民族連携の考えは、離日以降も、1912年の『聯亜趨言』や1921年の『亞洲之福音』⁸⁵⁾に受けつがれていったと思われる。さらにはチャウの手から、グエン・アイ・クォク、すなわちのちのホー・チ・ミンの「世界被圧迫民族会」(Hội Dân tộc bị Áp bức Thế giới)⁸⁶⁾に受けつがれてゆくこととなる。

＜追記＞ 引用に際して漢文文献は原則として原文のまま、邦文文献に関しては現行の当用漢字に改めた(ただし仮名づかいは原文のままとした)。また、原文における原著者の傍点などは適宜省略した。

参 考 文 献

- 秋山 清. 1968. 『日本の反逆思想』(新装第1版) 東京: 現代思潮社.
 有田和夫. 1965. 「清末におけるアナキズム」『東方学』30: 80-91.
 飛鳥井雅道. 1968. 「明治社会主義の帰結——『直接行動論』をめぐって」『思想』524: 263-281.
 Bernal, Martin. 1976. *Chinese Socialism to 1907*. Ithaca and London: Cornell University Press.
 朴殷植. 1972. 『朝鮮独立運動の血史』(東洋文庫) 姜徳相(訳注). 東京: 平凡社.
 朴慶植. 1979. 『在日朝鮮人運動史. 8. 15 解放前』東京: 三一書房.
 Boudarel, Georges. 1981. *L'extrême-gauche Asiatique et le Mouvement National Vietnamien*.

85) 両書とも日本では入手不可能と思われる。筆者未見。その簡単な解題は川本 [1966b: 285, 287] にある。

86) 1924年ボロディン(Borodin)の随員としてモスクワから広州に来たグエン・アイ・クォクが、1925年に廖仲愷やM.N. ローイ(M.N. Roy)の協力を得て組織した。これは南京におかれて、朝鮮人、インド人、インドネシア人、中国人、ベトナム人より構成されていたという[Duiker 1976: 202; Marr 1971: 256-260]。

84) はかに有田 [1965: 87 以下], 丸山 [1972: 25-26], 森 [1978: 170 以下] などにおける評価をも参照されたい。

- In *Histoire de l'Asie du Sud-est: Révoltes, Réformes, Révolutions*, edited by Pierre Brocheux, pp. 165-192. Lille: Presses Universitaires de Lille.
- 張玉法. 1975. 『清季の革命團體』台北：中央研究院近代史研究所.
- 張篋溪. 1957. 「光復會領袖陶成章革命史」『辛亥革命』中國史學會（主編），521-529 ページ所収. 上海：上海人民出版社.
- 趙芝薰. 1975. 『韓國民族運動史』梶村秀樹（監訳）. 東京：高麗書林.（原著『趙芝薰全集』1973. 第6巻所収. ソウル：一志社.）
- Duiker, William. 1976. *The Rise of Nationalism in Vietnam, 1900-1941*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- 外務省アジア局（監修）. 1960. 『現代朝鮮人名辞典』霞山会（編）. 東京：外交時報社.
- 外務省調査局（編）. 1950. 『現代東亜人名鑑』（昭和25年版）東京：東邦研究会.
- 外務省外交史料館文書 a. 「在本邦清国留学生関係雑纂，陸軍学生ノ部（二）」
- . b. 「仏国内政関係雑纂，属領関係，印度支那関係，安南王族本邦亡命関係」
- 『獄中書』→潘佩珠 [1966]
- 後藤均平. 1979. 『日本のなかのベトナム』東京：そしえて.
- . 1980. 「日本とアジアの人びと. 続歴史的人間. 16. 日越人民友好碑話」『すくらむ』7月号：57-60.
- 潘佩珠. 1966. 「獄中記」南十字星（訳）. 『ヴェトナム亡国史他』潘佩珠（著），長岡新次郎；川本邦衛（編），85-156 ページ所収. 東京：平凡社.（原著『獄中書』1914.）
- 『潘佩珠年表』
- HXXH 所蔵本：Hoàng Xuân Hãn 氏（在パリ）所蔵の漢文筆写本.
- NB: 1957. *Phan Bội Châu Niên Biểu*. Translated by Phạm Trọng Diễm and Tôn Quang Phiệt. Hanoi: N.X.B. Văn Sử Địa.
- TP: 1956. *Tự Phán*. Translated by Anh Minh. Huế: N.X.B. Anh Minh.
- 波多野太郎. 1973. 「日本と中国——『罪案』に寄せて」『経済と貿易』110：1-14.
- 狭間直樹. 1975. 「幸徳秋水の第一回社会主義講習会における演説について」（および幸徳秋水君演説稿の漢文よりの邦訳）『鷹陵史学』1：63-84.
- 平野義太郎. 1955. 『反戦運動の人々』（青木文庫）東京：青木書店.
- . 1966. 「中国革命報『天義』の日本における発刊——日中の初期社会主義者の交流」『天義』影印版巻末解説. 東京：大安.
- HXXH 所蔵本→『潘佩珠年表』
- 『石川三四郎著作集』第6巻(1978), 第8巻 (1977). 東京：青土社.
- 『石川三四郎書簡集』1957. 唐沢柳三（編）. 東京：ソオル社.
- 石母田 正. 1953. 「幸徳秋水と中国——民族と愛国心の問題について」『続歴史と民族の発見——人間・抵抗・学風』石母田 正（著），319-354 ページ所収. 東京：東京大学出版会.（竹内 好 [1968：384-410] に再録.）
- 伊東昭雄；小島晋治；光岡 玄；板垣 望；杉山文彦；黄成武. 1974. 『中国人の日本人観100年史』第2版. 東京：自由国民社.
- 糸屋寿雄. 1950. 『幸徳秋水伝』東京：三一書房.
- . 1967. 『幸徳秋水研究』東京：青木書店.
- Jansen, Marius. 1970. *The Japanese and Sun Yat-Sen* (Paperback Edition). Stanford: Stanford University Press. (初版 1954. Harvard University Press.)
- 徐大肅. 1970. 『朝鮮共產主義運動史. 1918-1948』金 進（訳）. 東京：コリア評論社.（原著 Suh Dae-Sook. 1968. *The Korean Communist Movement, 1918-1948*.)
- 『革命評論』東京：革命評論社.（国立国会図書館所蔵）
- 神崎 清. 1971. 『実録. 幸徳秋水』東京：読売新聞社.
- 河田悌一. 1978. 「否定の思想家・章炳麟」『辛亥革命の研究』小野川秀美；島田虔次（編），107-133 ページ所収. 東京：筑摩書房.
- 川本邦衛. 1966a. 「潘佩珠小史——その生涯と時代」『ヴェトナム亡国史他』潘佩珠（著），長岡新次郎；川本邦衛（編），223-255 ページ所収. 東京：平凡社.
- . 1966b. 「潘佩珠著作解題」『ヴェトナム亡国史他』潘佩珠（著），長岡新次郎；川本邦衛（編），283-289 ページ所収. 東京：平凡社.
- . 1972. 「潘佩珠 (Phan-bôi-châu) の日本観」『歴史学研究』391：25, 38-45.
- . 1980. 「東遊運動の挫折」『東南アジア・インドの社会と文化』山本達郎博士古稀記念論叢編集委員会（編），上，415-439 ページ所収. 東京：山川出版社.
- 景梅九. 1966. 『留日回顧——中国アナキストの半生』（東洋文庫）大高 巖；波多野太郎（訳）. 東京：平凡社.（原著『罪案』の抄訳.）
- 小島晋治. 1972. 「劉師培『垂州現勢論』——中国人・アナキストが夢想したアジア解放の

- ユートピア」(解説および訳文)『中国』99: 56-77.
- . 1978. 『アジアからみた近代日本』東京: 亜紀書房.
- 『國父年譜』1964. 中華民國各界紀念國父百年誕辰籌備委員會學術論著編纂委員會(主編). 台北: 中華民國各界紀念國父百年誕辰籌備委員會.
- 近藤邦康. 1962. 「章炳麟における革命思想の形成——戊戌変法から辛亥革命へ」『東洋文化研究所紀要』28: 207-264.
- 『幸徳秋水全集』第6巻(1968), 別巻2(1973). 幸徳秋水全集編纂委員会(編). 東京: 明治文獻.
- 久保田文次. 1976. 「辛亥革命における章炳麟と同盟会の対立」『木村正雄先生退官記念東洋史論集』木村先生退官記念事業会東洋史論集委員会(編), 411-436 ページ所収. 東京.
- . 1978. 「辛亥革命と帝国主義——孫文・宮崎滔天の反帝国主義思想について」『講座中国近現代史』第3巻(辛亥革命). 野田 豊; 田中正俊(編), 229-258 ページ所収. 東京: 東京大学出版会.
- クロボトキン. 1917. 『相互扶助論』大杉 栄(訳). 東京: 春陽堂.
- Lê Văn Hảo et al. 1967. *Kỉ Niệm 100 Năm Năm Sinh Phan Bội Châu (1867-1940)*. Saigon: Trình Bày.
- Marr, David. 1971. *Vietnamese Anticolonialism, 1885-1925*. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press.
- 丸山松幸. 1971. 「劉師培をめぐる人々(一)」『中国古典文学大系. 月報』10月号: 3-5. 平凡社.
- . 1972. 「無政府主義と伝統思想」『理想』464(1月): 18-26.
- 松田道雄. 1963. 「日本のアナキズム」『アナキズム』(現代日本思想大系16) 松田道雄(編), 9-62 ページ所収. 東京: 筑摩書房.
- 松本健一. 1974. 「幸徳秋水と北一輝」『近代日本と中国』(朝日選書, 上) 竹内 好; 橋川文三(編), 247-268 ページ所収. 東京: 朝日新聞社.
- 松沢哲成. 1973. 「宮崎滔天における“革命”」『宮崎滔天全集』第4巻巻末解説, 457-481 ページ所収.
- . 1979. 「宮崎滔天——不羈自由の行く末」『アジア主義とファシズム——天皇帝國論批判』松沢哲成(著), 89-119 ページ所収. 東京: れんが書房新社.
- 三木民夫. 1974. 「宮崎滔天における『支那革命主義』の確立——『暹羅殖民』活動を中心に」『民衆史研究』12: 195-215.
- . 1976. 「宮崎滔天における『三十三年之夢』前後の思想遍歴」『民衆史研究』14: 75-94.
- 『民報』影印合訂本. 1957. 1-26号. 北京: 科學出版社.
- 『宮崎滔天全集』第1巻(1971), 第2巻(1971), 第3巻(1972), 第4巻(1973), 第5巻(1976). 宮崎龍介; 小野川秀美(編). 東京: 平凡社.
- 森 時彦. 1978. 「民族主義と無政府主義——国学の徒・劉師培」『辛亥革命の研究』小野川秀美; 島田虔次(編), 135-184 ページ所収. 東京: 筑摩書房.
- 森長英三郎. 1968. 「直接行動論他」『幸徳秋水全集』第6巻巻末解説, 563-577 ページ所収.
- 森戸辰男. 1928. 「大杉栄著作概評」『未刊大杉栄遺稿』安谷寛一(編), 373-425 ページ所収. 東京: 金星堂.
- 村田静子. 1958. 「福田英子略年譜」『福田英子書簡集』唐沢柳二(編), 116-129 ページ所収. 東京: ソオル社.
- 永井算巳. 1968. 「社会主義講習会と政聞社」『東洋学報』51(3): 53-100.
- . 1972. 「民報封禁事件」『東洋学報』55(3): 36-71.
- . 1974. 「民報続刊をめぐる二, 三の問題」『信州大学. 人文科学論集』8: 11-24.
- 長岡新次郎. 1966. 「日本におけるヴェトナムの人々」『ヴェトナム亡国史他』潘佩珠(著), 長岡新次郎; 川本邦衛(編), 256-282 ページ所収. 東京: 平凡社.
- NB→『潘佩珠年表』
- 『年表』→『潘佩珠年表』
- 『日本平民新聞』→『大阪平民新聞』
- 西 順蔵(編). 1977. 『原典中国近代思想史』第3巻(辛亥革命). 東京: 岩波書店.
- 野村浩一. 1972. 「『アジア』への航跡——滔天の思想と行動」『宮崎滔天全集』第3巻巻末解説, 561-605 ページ所収.
- 岡崎精郎. 1947. 「中国革命運動における日華交渉——幸徳秋水をめぐる」『中国研究所所報』2: 27-37.
- . 1950. 「幸徳秋水における東方問題」『歴史学研究』145: 35-43.
- 小野信爾. 1978. 「辛亥革命と革命宣伝」『辛亥革命の研究』小野川秀美; 島田虔次(編), 37-88 ページ所収. 東京: 筑摩書房.
- 大野二郎. 1962. 「大陸浪人の原型——宮崎滔天」『思想の科学』9: 28-38.

- 小野川秀美, 1964, 「劉師培と無政府主義」『東方学報』(京都) 36: 695-720.
- , 1975, 『清末政治思想研究』(第2刷) 東京: みすず書房.
- 『大阪平民新聞』復刻版, 1-23号+号外 (11号より『日本平民新聞』). (明治社会主義史料集第5集) 労働運動史研究会 (編). 東京: 明治文献資料刊行会.
- 大沢正道, 1967, 『アナキズム思想史』東京: 現代思潮社.
- 大杉孝平 (編), 1978, 『日本とインド』東京: 三省堂.
- 大杉 栄, 1924, 『クロボトキン研究』東京: アルス.
- 『大杉栄全集』第3巻 (1925), 第4巻 (1926). 東京: 世界文庫.
- 大八木章文, 1974, 「章炳麟の印度論 (東洋史談話会発表要旨)」『史冊』(北海道大学文学部東洋史談話会) 1: 15-17.
- 小沢有作, 1973, 『在日朝鮮人教育論, 歴史篇』東京: 亜紀書房.
- 『劉申叔先生遺書』第1冊. (全74冊.)
- 『堺利彦全集』1970, 第3巻, 第6巻. 東京: 法律文化社.
- 『世界婦人』復刻版, 1-83号. (明治社会主義史料集別1) 労働運動史研究会 (編). 東京: 明治文献資料刊行会.
- 柴田静雄, 1979, 「ベトナム独立運動の亡命者を助けた浅羽佐喜太郎」『湄南文化』1: 25-27.
- 島田虔次, 1965, 『中国革命の先駆者たち』東京: 筑摩書房.
- 「新東亜」編輯室(編), 1980, 『朝鮮近現代史年表』鈴木 博 (訳). 東京: 三一書房. (原著『新東亜』1976年1月号別冊附録『開港100年年表, 資料集』の一部.)
- Shiraishi, Masaya, 1975, Phan Bội Châu and Japan. *Tonan Ajia Kenkyū* [Southeast Asian Studies] 13 (3): 427-440.
- 白石昌也, 1981a, 「滞日期のファン・ボイ・チャウ (ベトナム) と雲南省活動家との交流」『東洋文化研究所紀要』85: 37-105.
- , 1981b, 「東遊運動期のファン・ボイ・チャウ——渡日から日・中革命家との交流まで」『東南アジアの留学生と民族主義運動』永積 昭 (編), 229-310ページ所収. 東京: 巖南堂.
- , 近刊予定, 「ファン・ボイ・チャウ (ベトナム) と日本」『東南アジアと日本』矢野暢 (編). 京都: 世界思想社.
- スカラピーノ, R.A.; ユー, G.T. 1970, 『中国のアナキズム運動』丸山松幸 (訳). 東京: 紀伊国屋書店. (原著 Scalapino, Robert A.; and Yu, George T. 1961. *The Chinese Anarchist Movement*. Berkeley: University of California.)
- 武仲弘明, 1974, 「清末民国初における公理意識とナショナリズム」『歴史学研究』415 (12月): 12-20.
- , 1979, 「清末の対アジア認識をめぐって」『安田学園研究紀要』19: 41-53.
- 竹内 好 (編), 1968, 『アジア主義』(現代日本思想大系9) 東京: 筑摩書房.
- 竹内善作, 1948, 「明治末期における中日革命運動の交流」『中国研究』5: 74-95.
- 田中惣五郎 (編), 1948, 『資料日本社会運動史』第2巻. 東京: 東西出版社.
- 田中惣五郎, 1971, 『幸徳秋水——革命家の思想と生涯』東京: 三一書房.
- 丁則良, 1957, 「章炳麟與印度民族解放鬥争——兼論章氏對亞洲民族解放鬥争的一些看法」『歴史研究』第1期: 25-40.
- 『天義』影印版, 1966, 3-6, 8-10, 11-12, 15-19冊. (中国資料叢書6, 中国社会主义文献集2) 東京: 大安.
- 寺広映雄, 1954, 「中国革命に於ける中日交渉の一考察——宮崎滔天を中心にして」『ヒストリア』9: 9-17.
- , 1966, 「越南初期民族運動をめぐる日本と中国」『大阪学芸大学紀要, 人文科学』15: 136-144.
- The Lap; and Thanh Nam, 1981, President Ho Chi Minh's 91st Birthday (May 19, 1981): His Many Names and Travels. *Vietnam Courier* 17 (5): 8-11.
- TP→『潘佩珠年表』
- 『雲南杂志选輯』1958, 中國科學院歷史研究所第三所 (編), 北京: 科學出版社.
- Viện Văn Học, Ủy Ban Khoa Học Xã Hội Việt Nam, 1970, *Nhà Yêu Nước và Nhà Văn Phan Bội Châu: Kỷ Niệm 100 năm Ngày sinh Phan Bội Châu*. Hanoi: N.X.B. Khoa Học Xã Hội.
- 山田慶児 (編), 1970, 『中国革命』(現代革命の思想3) 東京: 筑摩書房.
- 山口一之, 1973, 「時事論の難易——義和団事変までの幸徳秋水」『史観』86・87: 86-97.
- 山口光朝, 1963, 「宮崎滔天のアジア主義——大陸浪人の一類型」『桃山学院大学紀要』1 (2): 59-119.
- 山泉 進, 1975, 「幸徳秋水, そしてアジア」『伝統と現代』32: 60-69.
- 山川 均, 1961, 『山川均自伝』東京: 岩波書店.

山根幸夫（編）．1972．『辛亥革命文献目録』東京
：東京女子大学東洋史研究室．
——（編）．1979．『近代日中関係史文献目録』

東京：東京女子大学東洋史研究室．
——（編）．1981．『辛亥革命文献目録（日本文）
（稿）．1973-1981』東京：東京女子大学．